

怪物たちと，バケモノと。

パセリセリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼は出会う。

タワーの上を颯爽と走る怪物たちと。

彼女らは出会う。

夜に浮かぶ月のような瞳を持つ、バケモノと。

それはそんな世界のお話。

目次

プロローグ	1
駿川たづな	5
秋川やよい	11
皇帝とバケモノ	17
少女とバケモノ	25
バケモノどもと、バケモノ	30
バケモノ研修生	38
怪物との出会い	43
バケモノの誘い	48
駆ける2人	55
駆ける2人 2	60
バケモノトレーナーと悶着と	70
バケモノ思う皇帝と	78
バケモノ思う皇帝と 2	83
鬱憤溜まる怪物と	89

プロローグ

ウマ娘―

その存在がいつから、歴史上に現れたのかは定かではない。
人と近く、遠い者。

人に近い目を見た目をしながらも、五感も身体能力も遥かに凌駕する
ウマ娘。

共に暮らし、時には争い―良くも悪くも永く、深い切っても切れな
い関係性を築いてきた別種の存在。

古代、近代、そして現在。

時は流れ、人の文化や流行が変わる中、彼女らの存在価値も大きく
変わった。

人を遥かに凌駕する身体能力は、全力で走れば時速50キロは超え
る。その身体能力を存分に発揮できる最高のステージが「ウマ娘
レース」である。

見目麗しい彼女らがその身体能力を。闘争本能を。勝利への飢え
を。たった1席の王座に居座るために全てを剥き出しにして走る
レース”

そして、栄光を掴んだ一握りの実力者のみが立つことを許される
「ウイニングライブ」

他にも、ウマ娘のアイドル―ウマドル―達によるメディアへの進
出。引退後もその身体能力を生かして格闘技に進出するものもいる。

今や、彼女らは世間から「偶像化アイドル」といっても過言ではな
いだろう。

そして、彼女らを支えるのもまた人である。

この世界は、基本「人」と「ウマ娘」で回っている。

さて、ここで問いかけたい。

果たして本当に、この世界にはこの2種しかないのだろうか？

なぜ、亜人―デミヒューマンとも言える存在が「ウマ娘」しか認識

されていないのだろうか。

遙か神代まで遡れば彼らは存在したのだ。

半神，人狼，エルフ，吸血鬼，雪女，サキユバス，デユラハン
全て『フィクション』？

ゲームや小説だけの話？

ふむ，確かに一理ある。

私も実際に見たことはないからね。

それでは逆に聞きたい。

いつから君たちは，その頭の中にある情報だけが世間一般で言う，
『当たり前』だと思っっているのかね？

『事実は小説よりも奇なり』だよ。

バツン、とテレビの電源を切る。

くだらない。ああ実にくだらない。

たまたま目が冴え，リビングの机に置いてあったリモコンを手に持
ちチャンネルを回していたそんな時だ。

ウマ娘という世間一般で誰もがそのレースを，存在を見たことのある『種』について適当な弁論を上げる番組に指が止まり，眺めてい
た。

だがウマ娘から亜人種ーデミヒューマンの存在を話し始めた時点
で一気に興味がなくなった。

何が亜人は存在するだ。何が『事実は小説よりも奇なり』だ。

そんなもの，存在するに決まっているだろう。

顔を手で拭い，テレビの上の時計にを向ける。その針が2時を回ろ
うとしていた時だ。ポケットの中から『ポコン』と電子音が鳴る。

(『こんな時間に誰だ。』)

気怠げに端末を取り出すと，画面にはメッセージが1つ浮かんでい
る。

「こんな夜だ。どうせ起きているのだろうか？」

こちらが起きていることを見越したような台詞に小さく笑い，彼に
通話を掛ける。

コールオンが2回。メッセージを送ってきた相手はそれに応じた。「やあ、こんばんは？おはよう？どっちでもいつか。」

「こんばんは、でしょう世間一般だと。」

深夜とは思えないハッキリとした声の主に、小さく笑みを浮かべながら挨拶を返す。向こうは笑いながら「ごめんごめん」と謝ってくる。相変わらずの元気な様子に小さく笑みを溢す。少しは眠そうに話したらどうなのだろうか。

「で？何の要件ですか。」

「ん、ああ。仕事だよ仕事。」

そう返す相手の声色は笑い混じりな様子から一転して、真剣なものに変わる。

「ウマ娘の存在は知っているな？無論その価値も、歴史もだ。」

「は？。」

「ああ、馬鹿にしているわけじゃない。念の為だ念の為。」

知らない方がおかしいだろうという質問。そして先程のテレビの内容も思い出し思わず口に出してしまった言葉に向こうは宥めてくる。

「知っていますよ。ライブ、レース、格闘技、ラジオ、テレビ、アイドル業。他にもウマ娘関連の仕事や運送業…人間以上の身体能力を持つ彼女らの種は今も昔も世間から欠かせないものですから。」

そうだ。今やウマ娘はただの種ではない。この世間の経済を大きく回す巨大な歯車と言っても過言ではない存在なのだ。

そんなことは誰もが承知している事実であり、今更問いただされるものではない。そんなことを考えていると相手はこう返す。

「じゃあ彼女らには莫大なお金が掛けられていることも知っているね？。」

「…学費やイベント、レースの開催費用ってことで？」

「そんなありきたりな事で電話などするものか。分かっているのだろう…ウマ娘という名の商品売買だよ。」

まあ平たく言えばコレクターに買われているという事だ。それも高額だね。」

淡々と話しているその声は低く、電話越しでさえも背中が凍るよう

な重圧を感じさせる。

少しの間が空いたあと、相手は再度口を開く。

「…今やウマ娘業界において、スター性のある者や素質のあるものほど高額な値がつけられている。地方、都心問わずだ。

まあ、それがプロスポーツ界などでいう契約という名文のものならいいさ。しかし、今回はそうではない。ゲロ以下の腐った精神を持つ金持ちたちが自分の私欲を満たすためだけに、『ウマ娘』という名の『宝飾品』を身につけ、自己満足に浸るだけだ。人権もクソもない。お前はまだ若いが…能力的にもピツタリだと判断した。」

というか私が命じた。

「強引すぎませんかねえ?」

「うるさい。」

もうやだこの暴君…仕事できる上に物理的にも勝てた試しがないのだから、これ以上は何を言ってもダメだろう。

ハア、と溜息を溢し、頭を抑えながら口を開く。

「いつからですか?期間は?場所は?任務内容は?」

「任務開始は1週間後から。内容と期間は明日…ではないな。今日の昼頃に迎えに行こう。そして場所についてだが、有名どころだ。お前も何度か耳にしたことはあるだろう?」

日本ウマ娘トレーニングセンター学園

通称『トレセン学園』だ。

駿川たづな

ジリリリッ!!!

「ううん…」

耳元でなるアラームに起こされ、止めるとともにベッドから体を起こす。

仮眠に近い睡眠時間だが、元々夜の方が冴える体質なこともあり、夜の睡眠時間は少ない方だ。

その分仮眠も取っているし、仕事柄元々疎らだ。問題なんてないに等しい。

昨晚…いや今日の夜か？電話された内容を思い出しながら立ち上がり洗面所に向かう。

蛇口を捻り、冷たい水で顔を洗い、歯を磨く。

いつものルーティーンを行いながら携帯端末をタップする。

見ればメールが一件届いている。

メールを開けば、1週間後に配属されるトレセン学園についての資料が添付してある。あの電話の後に送ったのであろうか？

(寝てないのか？いや、まさかな。)

メールを見ながら昨日の電話を掛けてきた相手の顔が頭に浮かぶ。仕事には真面目な人だが、昨日の電話からしても何か余裕のなさを感じていた。

「まあ、今考えてもしようがないか。」

実際に今日の昼頃迎えに来てくれるとのことだ。仕事の詳細についてもそこで聞かされるのだろう。それならば今出来ることをやってみてしまえ。

そう完結づけ、送られてきた添付ファイルに目を通す。そこにはトレセン学園について基本的なデータがまとめられていた。

場所は東京都府中市。

寮制の中間一貫校であり、生徒数は2000名弱。

150年続く伝統を持ち、「トウインクル・シリーズ」という華型レースに出場するために毎年多くの入学希望者がこの学園に挑んで

いる。

勿論、レース競技者ではなくスタッフ研修生としてのカリキュラム。一般的な義務教育から高校での勉強。ライブやメディアへの対応。スポーツ栄養学やレース座学など幅広い。そして日本最高峰の敷地とトレーニング施設の充実さを誇っている。

ただ、年々入学者が増えている上に優秀な成績を収める地方ウマ娘はスカウトなどの編入もあるため、それを教えるトレーナーの数が圧倒的に足りていないことも記されている。

グラフを見ればウマ娘の入学者、在籍数に対してトレーナーの数など微々たる増加しかしていない。さらにいえば途中退学者の数も尋常ではない。

「唯一抜きん出て、並ぶ者無し」

この学園のモットー：理念だろうか。なるほど、華やかな舞台に対して相当な鎬の削り合いがあるのか。成績が出なかった者には容赦がないらしい。

「まあ、競争の世界で生きているんだから当然か」

有名などころで言えば、競艇レースの競技者養成学校など、まず入学することが至難だ。そこから軍隊のような厳しい生活があり、訓練や試験を合格した一部の人間がプロになる。そこからプロで居続けられる難しさは想像を絶する。

我ながら悲観的かつ、非人道的とも言われるかもしれないが、競争社会なんてそんなもんだらう。生き抜けるかどうかで、そこで実際に生きている奴ら次第だ。赤の他人が勝手に首を突っ込んではいらない領域というものは存在する。

まあ別にウマ娘と密に関わることはないだろうから、そんなところまで心配する必要はないか。そう思いながら資料を読み進めているとある項目に指が止まる。

そこには、なぜトレセン学園が地方のトレーニングセンター学園と一線を隠したセキュリティが置かれているのか纏められていた。

表立ってない。いや、もしそんなことがされていればトレセン学園という大ブランドが崩壊しかねない程の事件の数々。

チームウマ娘によるトレーナーの誘拐失踪。

メディア、過激派のファンによる圧力によつてのトレーナーおよびウマ娘の自傷・自殺未遂事件。

トレーナー同士による殺傷事件。

トレーナーを巡つてのウマ娘同士による乱闘。

そして、引退バ数名の行方不明事件―これは解決はしているが、数十年前の話だ。

大なり小なり：圧倒的に大きなものが多いに越したことはないが、その中でもより危険なものが幾つもある。

セキュリティについては、トレーナー自身の身を守ることは勿論のこと、ウマ娘達のプライバシーやプライベートを守るために厳しいものが置かれている。

学園内外に取り付けられた監視カメラの数や警備員の設置数、置かれる時間帯。寮に戻る際の門限と寮の部屋内部の詳細。そして万が一のたれに對ウマ娘制圧団体及び公安による特殊部隊がいつ行動したのかまだ纏められている。

光あるところに影ありとはいうが、ここまでハッキリと明暗分かれているのも珍しい。

また、学内の情報といえば、学園に在籍するウマ娘達に振り分けられた寮の各部屋とメンバーの名前。在籍するトレーナーが持つチームとそのメンバーまで纏められていた。

こちらに至つては読むだけで頭が痛くなるが、仕事上ある程度覚えていかなければならないかもしれない。

なんせ「ウマ娘」という人と近い種族は、その見目麗しい容姿のため存在するだけでも価値が生まれるのだ。繁栄しているとはいえ全世界の人口比で見れば一般的な人類と比べればその数は少ない。

だからこそ、そう言ったコレクターが大金を叩いてでも集めたがるんだろう。反吐が出る。

腹の奥底でドス黒いモノが浮かび上がる中、手に持っていた携帯が震え出す。

通知画面を見れば、昨日の相手からだつた。

「はい、もしもし」

「お、起きてたな。メールの中身はもう読んだ？」

相変わらずこちらの行動を見透かすように話す相手に、小さく溜息を零す。

「ええ、中々の魔境っぷりで。」

「アツハツハ！まあ事件だけ並べればそうだが、実際に頻繁に起こるわけではないよ。」

ウマ娘は指導してくれたトレーナーに懐きやすいんだ。長い年月をかけて…少なくとも3年ほどかな？二人三脚、人バ一体となつてレースに挑むからね。ならば、チームを預かり、指導するものが増える中で距離感を誤れば嫉妬も生まれるだろう。彼女らだって思春期だからね。

そのミスを、過ちを反省させ、正すのはいつだって学園の大人の仕事だよ。ただ…今回は学園の手に余る。」

「…だから俺ですか。」

「私が動いても良かったけど…事情によりちよつと、な」

申し訳ないという風に話す相手に「いいですよ。」とだけ返す。あの人にだって事情や仕事もあるのだからそこは責められない。

「助かるよ。迎えの時間までもうすぐだ。ちゃんと身支度整えときなさいよ。じゃあね。また連絡する。」

そう言つて電話は切られる。だいぶ資料を読むのに没頭していたのか、時計の針はだいぶ進んでいた。

早足で準備に取り掛かり、ノートパソコンや財布など必要なものをカバンに押し込む。服装はそれなりに纏まれば良いだろう。所謂カジュアルスタイルというやつだ。

そんなこんなで準備している間に、ピンポンとインターホンが鳴った。

「今出ます。」

「遅いぞ。」

少し慌ててドアを開ける、廊下に出る。目の前には栗毛に白い流星の髪を携え、青に赤の線の入った帽子を被る。ガタイの良い女性が

立っていた。

彼女こそ電話の声のヌシ。そして俺の上司である“年藤みそら”である。

そんな彼女から、ある匂いを感じ眉間に皺を寄せる。『嗅いだことのない女性の匂い』だ。それもついさつきまで一緒にいた匂いのつき方：恐らく近くにいるのだろう。チラリと周りを見渡す。

それを見て彼女は小さく笑うと、目の前で「待て」という風に手を突き出す。

「相変わらずの嗅覚だな。落ち着け、私の知人だ。」

そう言うのと年藤は右側：階段のある方を向く。

「たづな！出てきなよ！コイツがさつき車で話した私の部下：いや弟子かな？紹介したい。」

「：凄いですね。本当に気づかれるとは思いませんでした。」

階段下から現れた緑の制服と帽子に身を包んだ、『たづな』と呼ばれた女性は目を丸くしながらこちらを見るも、ニッコリと笑いこちらに近づいてくる。

「はじめまして。トレセン学園で理事長秘書を務めております、駿川たづなと申します。あなたのお名前を聞いてもよろしいですか？」

丁寧に自己紹介をする駿川さんの言葉を受けて、こちらも頭を軽く下げ紹介をする。

「銘無ななしといます。よろしくお願いします。」

簡単にそれだけ伝え頭を下げれば、彼女もよろしくお願いします、と会釈する。随分と物腰の柔らかい女性だ。

「よし、互いのことはまた車の中で話してくれ。銘無には早速で悪いが、これからトレセン学園に向かうとしよう。あ、昼飯食べてなければ向こうで奢るから我慢してくれ？」

「了解。」

そう返事すると彼女は「よし」と頷き階段に向かう。その後を駿川さんと俺も追い、車に向かった。

「乗ったな。それじゃあ行こうか。」

こちらがシートベルトを着用したのを確認し、年藤は車を走らせ

た。

秋川やよい

年藤の車に揺られながら数十分、目的の場所に到着する。

バカ広い敷地の門を潜り、たづなさんの案内の下ある部屋の前にたどり着く。

「理事長、例の2人をお連れしましたよ。」

「うむ、了承！入るがよい。」

比較的若い、そして幼いような元気な声が聞こえてくるとたづなさんは「どうぞ」と笑顔で扉を開ける。

「歓迎！ようこそ我がトレセン学園へ！」

「にゃー」

2人の目の前には、白と青を基調とした制服を見に纏い、頭の上に猫を乗せる理事長と名乗る少女―秋川やよいが立っていた。

その手には「歓迎！」と書かれた扇子が収まっている。

「久しぶり、理事長ちゃん。」

「はじめまして。」

顔見知りなのか、年藤はヒラヒラと手を振りながら挨拶を返す。此方も頭を下げて挨拶をすれば理事長も「うむうむ！」と笑顔で頷き返す。

「感謝！今は…『年藤』氏と呼ばば良いのか？」

「『みそら』で良いですよ。」

「承諾！みそら殿、まずは我々の声に応じて頂けたことに深く感謝したい。ありがとう。」

深々と頭を下げる理事長が顔を上げた際、そこに笑顔はなく、真剣な眼差しを向けてくる。

「お茶を淹れてきますね。皆さんは此方でお待ちください。」

その言葉を受け部屋にある椅子に皆腰をかける。その後慣れた手つきでたづなさんが紅茶の入ったカップをそれぞれの前に置き、理事長の横に腰を下ろした。

「さて、私はたづなから話は一度聞いたけど、銘無もいることだし。改

めて内容を聞いても宜しいかな？」

「了承。結果から言えばここ暫く、我がトレセン学園は外部から人的被害を受けている。」

焦心。現在の学園生徒会や上層部とも話し合ったが迂闊に手を出せるような問題でもなかった。下手を打てばトレセン学園の価値も下がり、生徒であるウマ娘達にも余計な被害が出かねない。」

「そこで今回、みそらさんにこの話を持ちかけてみるのはどうかと私が理事長に提案したんです。極めて個人的なお願いにも関わらず、内容を聞いてくださってありがとうございます。」

申し訳なきように話したづなさんは年藤の方を見る。

「謝らなくていい。寧ろよく私に話してくれたね。ありがとうございますたづな。」

彼女に笑顔を向けて返すと、年藤さんは一口紅茶を飲む。たづなさんの表情も先よりも柔らかくなっていった。

「警察には話さなかったのですか？この学園は特殊警察団や対ウマ娘制圧団体と繋がりもあるくらいだ。それくらい容易でしょう？」

「難航。すでにそれは済ませた。しかし思うような結果が得られることはなかった。」

今学園で起きている問題は大きく3つある。

1つ。我が学園のウマ娘達およびトレーナーへの悪質な贈り物。これは彼女達に渡る前に学園側で検査してから渡しているから君達に任せるものではない。

1つ。我が学園のトレーニングエリアコースの破損：芝やダート、備品の破損など多く整備士の手が追いつかない。警察も導入して貰ったが“ヒト”の持つ身体能力では不可能な範囲だ。」

そう話して理事長は机の上に写真を置く。

年藤さんと2人で確認すれば酷いものだ。

整備された芝は剥がされ、砂利の混ざったコース：ダートには鋭利な鉄屑が。

ゴール板や柵、観客席エリアはまるで大きな爪で引つ掻いたような痕や、大型シヨベルカーでも振り回したのかというような惨惨なるも

のだった。

なのにそんな大型機械を搬入した痕跡がないとなれば一般の警察もお手上げとなったのだろう。

「…これは確かに『こちら側』の奴らの犯行ですね。」

「質問。『こちら側』と言うのは？」

写真をすべて見終え、理事長の顔を見ながら話すと彼女はそう返す。

「この世界では…まあこの学園で例えて言うので有れば人類は、トレーナーのような『人間種』と、ウマ娘のような『亜人種』の2つに分類されます。

世間ではウマ娘が圧倒的な知名度・人口数を誇っておりますが『亜人種』は何もウマ娘だけではないのですよ。例えばそうですね…」

『人狼』とか

「!!?」

ガタツと大きな物音を立て、目の前の2人は椅子から腰を上げようとしていた。

その目には未知のモノに対する恐怖、驚きの感情がハッキリと映っている。

漫画やゲームでよくある人狼で思いつくような耳と尻尾。黒色の毛に覆われたそれが目の前の男に急に生えているのだから。

「きよ…驚愕ッ！本物なのかソレは？いや、そもそも人狼なんてものが存在するのか!？」

「耳も尻尾も本物ですよ。ほら、爪も鋭いし、八重歯の部分もウマ娘やヒトのそれとはちがうでしょう。何なら触ってみてもいいですよ。」

そう話すと彼女らは恐る恐ると手を伸ばし、生えてきた耳と尻尾にそれぞれ触れる。

触る直前にピコピコと動かすと大袈裟に驚いた。

「あ、本当に生えてますね…フワフワ、コリコリしてて気持ちいいです。」

「尻尾もフサフサだな…ボリユームもあつて柔らかいしクセになりそうだ。あといいい匂いがする。」

一瞬驚くもそのあとは割と大胆に触ってくる。理事長に至っては尻尾をむぎゆつと抱きしめている。

「分かる、分かるぞ。銘無の尻尾は一級品だ。しかし2人とも、そろそろ本題に戻ってくれないだろうか？」

困ったように話す年藤さんの一言で2人共ハツとしたように意識が戻されると、何事もなかったかのように目の前のソファに戻った。「…まあこのように。この世には多種多様な『亜人種』が存在します。俺のような『獣ベース』雪女や天狗のような所謂『妖怪ベース』そしてデユラハンやオーク、コロポックルのような『モンスターベース』…まあ血が薄くなったり血縁が絶えたりでゲームや漫画のような姿ではない場合の方が多い種もあります。」

そうは言っても、ヒトよりも遥かに身体能力は強化されています。中にはウマ娘以上の種も居ますし…この写真のような被害はそういったら起こしたと思っただけではないでしょう。」

そう話しながら耳と尻尾を消すと2人は残念そうな顔をする。思ったよりも好かれてしまったようだが、今は無視する。

「因みに聞けど、こんな大きなことが立て続けに起きた事例はある？ 私も知っている情報はコイツに共有したけど隠していることもあるのでは？」

年藤が理事長ら2人の顔を見れば、横に首を振られる。

「否定。こうも目立つようなことが立て続けに起きてなるものか。そのために代々の理事長や多くのスポンサーのお陰もありセキュリティシステムの向上ができて…といってもまだまだ課題は山積みであるのも事実。」

「ふうん…となると、だ。」

他の亜人種団体による妨害行為の線が濃厚か。」

「えっ？」

年藤の言葉にたづなさんは驚いたように目を見開くも、年藤は「考えてみる」と話を続ける。

「150年も続くトレセン学園を中心に地域都心部問わず『ウマ娘』を育成するトレーニングセンターの運営実態。年内多く行われる

様々なレース。そしてウイニングライブ。近年はウマドルやウマ娘のみの格闘技世界、競技への進出。

多種多様な業界に進出する「ウマ娘」という「亜人種」がもたらす経済効果と世界への影響度は昇龍が如く、だ。

さらに言えばヒトとウマ娘の密接な関係は歴史上からも窺える切っても切り離せないものとなっている。

だがまあ：他にも多くの亜人種がいる中で「ウマ娘」だけが優遇されているのは可笑しいと思う奴らも当然いるわけだ。

中には迫害された種もいるわけだし：神代まで遡れば生まれながらに「人類の敵」とされる奴らもいる。」

「そして、ウマ娘の近年の活躍を踏まえて「反ウマ娘団体」とでも言うか？そういった亜人種を中心とした組織の行動が活発になっている。」

私からしても目をつけていた矢先だったから、タイムリーだったよ。」

そういつて彼女はゴソゴソと胸ポケットを漁り、名刺入れを取り出した。

「個人電話でもいいんだけど、一応会社の名刺も渡しておく。銘無も出さない。」

そう彼女に促され、自分も上着の内ポケットから名刺を取り出して2人に渡す。

そこには氏名、電話番号やメール。

そして所属している組織名「borderless」と書かれていた。

「ウチの会社は一般人から亜人種含めて様々な奴らが所属しているね。警察や公安とも関係はないこともないけどまだまだ信頼関係は満足な段階まで行ってない：あまり表立ってない組織だからって言うのもあるけれど仕事はきっちりやるよ。」

それに今回は私にも少なからず縁がありそうだし、協力できることは全部するよ。仲間にも数人声をかけよう。

今回の件については私の部下でもある、この銘無が担当する。歳は

若いけど、実力はあるよ。

ウマ娘に關してもある程度知識はあるから、問題はないと思う。」

ポン、と彼の方に手を置いて年藤は笑った。

「感謝！銘無くん、よろしく頼む！」

「此方こそ、早急に解決できるよう努めますよ。」

差し出された理事長の手に応じて、握手をする。

だがここで大事な事を聞く事を忘れており、そのまま彼女たちに質問をした。

「今回の件について、任務期間を聞くのを忘れていましたね…なるべく早くカタをつけたいでしょうし、いかがいたします？」

「ん？特に期間は決めていないぞ？というか当分はトレセン学園に身を置いてもらう。」

そう話す年藤さんに「は？」と思わず返してしまった。

彼女は言うの忘れていたな、と付け加えるとニツカリと笑って衝撃の一言を言う。

「辞令だ。1週間後からお前を正式にトレセン学園対亜人種鎮圧員兼トレーナーに任ずる。」

傭兵じみた生活から卒業するいい機会だ。しっかり頑張れよ。」

数秒の沈黙。

そして理事長室から男性の叫び声が、トレセン学園に響き渡った。

皇帝とバケモノ

「はあ〜…」

「あ〜…その、すまん前振りもなく。」

何度目か分からないため息に、先程の爆弾発言を投下した年藤は苦笑する。

現在時刻はお昼過ぎ。言っていた通り学園内のカフェテリアにて昼食を囲んでいる最中だ。

当然ながら、この学園のほとんどの割合を占めるウマ娘たちと数人のトレーナーたちで賑わう最中である。

ただし見慣れない2人、そして緑の制服に身を包むたづなさんが一緒に卓に座って昼食を取っている姿は自然と注目を集めていた。

「みそらさん！彼に何も言わずに連れてきたのですか!？」

「いや、いつ切り出そうか迷っている内に忘れてしまっていてね…：我ながら申し訳ないと思う。」

だがこいつは傭兵じみたというか、根無草というか…：この年になるまでも国内外問わず様々な仕事を受け入れていてね。

組織の中でもかなり若い方だし…：大学に行っている訳でもないからなあ。一回腰をおろして職に就かせた方が良いだろうと上の奴らとも話し合ってたな。」

バクバクと目の前の巨大なハンバーグを食べ崩しながら話す年藤に、隣のたづなさんは「もう〜…」と此方に同情するように言葉を漏らす。

「ウチのトレーナーになる為には現場研修はもちろんの事、学業試験や面接。理事長による判断含めて全国トップの難易度の試験がいくつもあるのですよ?。」

ウマ娘の知識が多少あるくらいではとても受かりませんし…：研修だってどこかのトレーナーの元につかなければなりません。その期間だって適正がなければ落とされることはみそらさんも知っているでしょう?。」

たづなさんの話す通り、ここトレセン学園のトレーナー試験という

ものは最大にして最難関を誇るような倍率だ。

学業、研修、実績、ストレス耐性などなど様々な試験をクリアし、最後に理事長による面談を通し適正有りと判断されて、ようやくスターラインとなる。

そのあと実際にウマ娘のトレーナーとなり、満足な成績を挙げられなければ当然トレセン学園を去ることもなりかねない。

高給取り、トレーナー寮、有給制度など色々と高待遇な反面ウマ娘との距離感、メディア関係など考えれば心身共に相当の負担のかかる職だ。

だからこそ順当するレベルの難易度の試験なのだろうが、まあ今はそんなことどうでも良い。

(事件解決までこの学園に居ることになると思っていたが、こんな事になるとは…)

今からでも断るか？いや、しかし事が起きているのを目の当たりにしてこの場を去るのも…

悶々として悩む男を目の前に、変わらず美味しそうにハンバーグを食べる年藤。横にいるたづなさんも日替わり定食のオカズー本日は鯖の味噌煮を食べ始める。

「この学園には新人トレーナー研修制度や、トレーナー希望者のためのカリキュラムもあるだろう。確か最短で2年だったか？義務教育は勿論、高校の学業もしっかり修めているから研修自体に受かる資格は十分だと思うが？」

「短くても2年なんです！

しかも彼には別の任務解決もあるので、本格的なトレーナー研修も同時に行うとなると負担は計り知れません！

それに…先程は理事長が言っておりませんでした。3つ目の問題だつてあるんですよ。」

たづなさんの言葉に反応し、体を起こす。

確かに理事長は3つある問題の2つしか話さなかった。

最後の上司の言葉に全て持っていかれたが、それを聞く事が仕事を受ける上でも重要な事である。

年藤さんも食事を中断し、話を聞く姿勢になるとたづなさんはボソボソと話し始めた。

「3つ目の問題は…申し訳ないのですがトレーナーの数が足りていないのです。」

近年ウマ娘の入学者、転入者が増えていく中でチームを持つトレーナーも一時期増えたのですが…コミュニケーションが上手く取れなかったり、特定の娘に集中してしまい他の娘達と関係に軋轢が生まれたり…時には対ウマ娘制圧団体も導入することもあります。

そうなるも実力もあり、有名なトップトレーナー中堅トレーナーばかりに人気が集まってしまっています…その方達の負担も大きくなるばかり。

この学園のトレーナー及び職員の福利厚生は充実している方ではあると思いますが、それでもカバーしきれません。

今はなんとかなっている部分もありますが、将来を見据えるとトレーナーという存在は欲しいだけ欲しいというのが現状です…

幸い、みそらさんはトレセン学園のトレーナー性格適正、業績、学績全てクリアしておりますから、正直な話私は貴女が受けてくれると思っていたんですよ！」

頬を膨らまし、睨みながらそう話したづなさんに上司は視線を逸らした。

「ごめん…私もやれるならやりたいが別の大型任務が入っていて其方に尽力しなければならぬんだ。亜人種の問題は様々だね。私も部隊長を務めているし、後任も育ち切っていないんだ。」

「年藤さんはウチの格闘技のエキスパートですし…対亜人種の犯罪行動を何件か鎮めているやり手なんですよ。あと亜人がもつと表立って自由に動けるような活動もしていますから、ウチの組織でもかなり多忙な方ですから厳しいですね。」

彼女は武力、言動力そして人脈とまだ二十代ながら並々ならぬ実績を残しているやり手で、本当に様々な仕事に追われるような人物だ。

そんな彼女が、一個人の依頼の為に時間も労力も割いて行動していることから、よほどのこの学園…もしくは「駿川たづな」という存在が

大切なのだろう。

「…分かりました。寧ろ電話した翌日にここまで準備してくださっただけでも感謝しきれません。これ以上の無理は言えません。」

言い過ぎました。そう言っただづなさんは上司に謝ると、年藤も「気にしていない」と笑って返す。

「もちろんアドバイスは送るし、私ができることはする。人手が足りない場合は制圧部隊や警察にも知り合いがいるから声を掛けよう。」

流石にウチで体力お化けの銘無でも限界は来るだろうしな。

それに現状、私のチームの中でトレーナー適正が1番高いのは此奴だよ。適当な人物を送るわけにもいかないから、一度信じてみて欲しい。」

真剣な眼差しで話す様子に、たづなさんも納得したのか、此方を見る。

「銘無さんは良いのですか?」

「直属の上司にここまで太鼓判を押されたとなると退くに退けませんよ。やれるだけやってみます。」

腹を括りそう話す俺に、たづなさんの瞳が若干潤む。そして意を決したように口を開いた。

「分かりました!理事長にもその旨をお伝えしておきます。」

銘無さんの新しい居住区についての諸々手続き、そしてトレーナー育成カリキュラムへの参加手続きも此方で準備します。此方のことは気にせず、まずは事件解決の方お願いします。」

先程までの不安が振り切れたように、彼女は「よし!」と気合を入れる。

「あと、これを持つとけ。現場調査の際他のトレーナーやウマ娘達への証明となる。」

理事長の印鑑が押された学園立入許可書と白い小さな箱を年藤さんから手渡される。

箱を開ければ、白いクッションの真ん中に丸いバッチが鎮座している。蹄鉄の上に交差する斜線:対ウマ娘鎮圧団体が身につけるマークと同義のものであった。

「対亜人種鎮圧ということとは、当然暴走したウマ娘の対処も含まれる。ウチの組織、私のチームにいる時点でその資格はクリアしているからな。」

バッヂは常に身につけるか側に所持しておけ。

証明書は今日明日は持つといたほうが色々と思おうぞ。」

「ありがとうございます。」

証明書はカバンの中のファイルに、バッヂは上着のジャケットに着ける。

それを確認すると、年藤さんをはじめ3人は改めて食事に手をつける。少し冷めたご飯になったが、心なしかいつもより食事が旨いと感じられた。

授業が終わるベルが鳴り響くと、学園内は生徒の声で賑わい始める。

次のレースに向けてトレーニングに向かう者。

友人たちと談笑する者。

休みならばと図書館や、外の娯楽施設に向かう者。

鎬を削りあうトレセン学園においても、華の女子校生―青春を謳歌するのも彼女らの仕事だ。

そんな中、コツコツと規則正しい靴音と共に悠然と歩く少女が1人。

長く、暗めの栗毛に白い三日月が一条。

アメジストのような瞳を持つ彼女が廊下を歩けば、周りからは視線を向けられる。

憧れ、羨望、期待、重圧など様々な感情が混ざったそれを受けるも、彼女の顔は涼しいものだった。

名を「シンボリルドルフ」

試験、模擬など全てのレースにおいて他を圧倒したその姿には新人からベテランまで声を掛けないトレーナーなど存在しない。

生まれながらにウマ娘としての高いレベルの英才教育を受け、全てを血肉に変えた彼女は並のトレーナーでは霞んでしまうような存在である。

そんな彼女には、偉大な夢がある。

「誰をも導く頂点となり、皆を導くウマ娘で有りたい」

夢物語だ。無理のある話だ。非現実的だ。

その夢を語れば誰もがそう返した。

ならば、それを実現させてしまえば良い。

全てのレースに勝ち続け、全生徒の規範となる。

その為にトレーニングにも、レースにも手を抜かない。学園を支える為に生徒会にも入り、職務を全うしようではないか。

(昨日はターフの状況を確認したし、今日はダートの方に向かおう。)

ここ最近学園内で起きている問題の一つとして、トレーニングエリアのコースや模擬レースコースが何者かに荒らされてしまった。

警察の迅速な取り調べもあつたが、結果は振るわない。しかし傷をそのままにするのも頂けないことから、生徒会と学園上層部は修復補修の計画を進めている。

その必要書類作成のためにも現場のことを調べなければならない。私も生徒会の一員であることから仕事の一部を受け継いでおり、今からそこに向かおうとしていた。

(確かダートコースは、レース内への鉄片含む危険物の混入やレースの柵、観客エリアの広範囲に及ぶ破損被害だったな。)

兎にも角にも今のままでは練習もままならない。一刻も早く修復に移らなければ。

そんなことを思いながら現場に着く。立ち入り禁止のテープが張り巡らされたそこに向かうと、見慣れない男性が立っていた。

彼は破損されたエリアを見渡し、時折屈んでその破片や破壊痕を注意深く観察する。かと思えばダートの上を歩きコース内の異物を見つけては手に持つバケツに投げ入れていく。

(誰だ？ 少なくとも学園内の人間ではないだろう。顔を見た覚えがない。)

一度見た顔は忘れないという自分の記憶力には少なからず自信がある。懸命に振り返るも彼ののような人物とは一度も出会ったことがない。完全に初見だ。

ならば警察の関係者だろうか？

それもない。時折調査にはくるが事前に生徒会にも連絡が入る。ましてや私服で、単独で調査なんてするだろうか？

(よし…)

悶々と悩むも埒があかない。

そう結論づけて彼の方へ歩み寄る。

「すみません。」

後ろから声が聞こえて振り向くと、そこにはトレセン学園の制服に身を包んだ1人の少女が立っていた。

栗毛に白い三日月の髪。アメジストの瞳。

まだ幼いながらも学内ですれ違った娘たちとは一線を隔す佇まい。特徴的な耳を此方に真つ直ぐに向けて、尻尾はユラリと揺れる。そしてその目は此方を射抜くように向けられていた。警戒している合図だ。

その姿を見て誰なのかはすぐに理解できた。

送られてきた資料にあった、有力株の1人だ。

名をシンボリドルフ。

同年代で敵なしとさえ言われる優秀なウマ娘。

そんな彼女に声を掛けられ、作業を止めて体勢を変える。これ以上変に警戒されるわけにはいかない。

「何用かな？」

「ツ…！対ウマ娘鎮圧団体の方が何故このよう場所におられるのですか？」

やってしまった。

ウマ娘たちからすれば、このバッジは自分たちにとって武力を用いた抑止団体。良い思いなどされるはずもなく彼女は後ろ向きに耳を伏せ、目が一層険しくなる。

(面倒なことになった。先程の書類をさっさと渡すか。)

一歩前に脚を踏み出せば、彼女の尻尾がピンと上に伸びる。思い切り警戒されているが致し方ない。なんせ件の書類の入ったカバンは

彼女の近くの地面に置いてしまっているのだから。

彼女の痛いくらいの視線を無視しつつも、カバンを手に取り、先程年藤さんから渡された許可証を取り出す。そしてそれを目の前の彼女に渡した。

「立入許可書：理事長の印鑑もある。」

「警戒させて悪かった。後々理事長さんから紹介されることになるだろうが、これも何かの縁だ。君には今のうちに話しておこう。」

今回の一件を機に、新しくこの学園の対亜人種鎮圧員に配属た銘無だ。よろしく頼むよ。」

警戒は薄れたのか、不安や迷いがあるのかピコピコと耳を動かし、尻尾を揺らすシンボリドルフしかし「コホン」と咳払いをすると耳と尻尾の動きは止まり、毅然とした態度となる。

「失礼致しました。」

この学園の生徒、シンボリドルフです。

此方こそ、宜しく願います」

そう言つて彼女は書類を返すとも提案をしてくる。

「良かったら、他の場所の調査結果もお教えしましょう。こう見えて生徒会の端くれ。」

事件を解決してくれる助けとなるのではあればいくらでも情報をお渡しします。」

ハキハキと話すその姿は中学生のものではない。

人の上に立つ者特有の雰囲気を持つ彼女の言葉に有り難く甘えることにしよう。

「助かるよ。自分でゼロからだ時間も労力も掛かるからね。その代わり、他のメンバーへの説明はお願いしても良いかな？」

「もちろん。それではご案内します。」

そう微笑みながら話す彼女はくると踵を返し、先を歩く。

地面に下ろしたカバンと、破片の入ったバケツを手に持ち小さな彼女の背中を追う。

これが皇帝シンボリドルフと、バケモノの出会いだった。

少女とバケモノ

シンボリルドルフに案内されて生徒会室の中に入る。

他のメンバーはあいにく居なかつたが、彼女は慣れたように動くといくつかのファイルや資料の束を此方に渡してきた。

「緑のファイルはターフ。白のファイルは観客エリア。黄色は君が先程いたダートの被害状況がまとめられています。あとは最初に発見した者たちの声をまとめたものや、警察の方々の取り調べ資料です。」
「そうか。ありがとう。助かるよ。」

「当然のことでしたまです。」

そう話す彼女だが、尻尾が勢いよく揺れている為嬉しいという感情が丸わかりである。

ウマ娘は亜人種の中でも特に感情が分かりやすいと上司から何度も聞いたことがあるが…なる程、ここまでのものか。

「さて、この資料を今ここで見ても良いかな？」

「だったら、此方の席にお座りください。飲み物も今お出ししますね。」

席を案内し、彼女は奥の簡易キッチンの方へと向かっていく。先程の警戒心はどこにいったのであろうか。耳をすませば彼女の小さな鼻歌まで聞こえてくる。

それにつられ小さく笑みを溢すと、彼女に案内された席に腰を下ろし、ファイルを広げる。

大体が理事長室で見た画像と一致したが、細かな傷の形や様子。側に落ちていた物品。そして第一発見者の声が事細かに記されている事でこれから調べようと思っていた事が大きく省略できた。

気になる点をカバンから出したルーズリーフに殴り書きしてまとめていくと、シンボリルドルフがお茶を2つお盆に乗せて戻ってきた。

「私も座っても？」

「勿論。」

そう聞くと彼女は湯呑みを一つ此方の前と自分が座る席の前に置き、腰を下ろす。

興味があるのか此方をじっと観察してくる。視界の端には尻尾が時折揺れていた。

(有望株にして大人びた娘たちとはだと思っていたが、まだ中学生か。)

可愛らしい彼女の一面を見て、ペンを置き湯呑みに手を掛ける。適温になったお茶を一口啜るとホッと一息ついた気持ちになる。

「お疲れですか?」

「多少はね。」

慣れない場所に来て初日。任務の件や上司からの辞令。道中ウマ娘の子たちから向けられた多くの視線や囁き声など外的要因含めて知らないうちに削られている。

しかし、目の前の彼女のお陰もあり判ったことも多くある。ある程度どんなタイプの亜人種が妨害に来たのかも理解できた。

あとはタイミングを図るのみだが…暫くは泊まり込みになりそうだ。

長く息を吐き、気持ちを切り替える。

この一件に関してはそこまで時間がかかることはなさそうだ。

「改めてお礼を言う。情報提供感謝します、シンボリルドルフ。」

「フルネームだと言いくらいでしょう?これからは「ルドルフ」と気軽に呼んでください。」

「了解した。ところでルドルフはトレーニングはなかったのか?レース場は使えなくても室内トレーニングルームやプールでできただろう?」

「今日は休日ですので。自己管理も蔑ろにする気は有りません。」なるほど、だからあの場所にいたのか。

学生が1人であんな場所に来るから何事かと思っていたが、正義感ゆえの行動だったらしい。

「トレーナーはもう居るんだろう?まあ今の俺には関係のない話ではあるがね…」

「いいえ、いません。」

「それは…何故？」

渡された資料と、道中に自分たちに向けられた声がに耳をすませば彼女は大部分のウマ娘達から注目を浴びている存在だ。

当然この学園の中堅、ベテランと言われるトレーナーから引く手数多：てつきりもう誰かと契約を結んでいるものだと思っただけに驚かされる。

「私には叶えたい夢…目標があります。両親は応援してくれました。だけど、他の大人達は無理だと、夢物語だと嗤うのです。」

顔は俯き、膝に置かれた拳に力が込められ、口は固く結ばれる。それは彼女が何度も大人達が、社会の常識が持つ壁に拒まれた証だろう。

「その目標は、果たして俺が聞いても良いものかな？」

そう話すと、彼女は驚いた風に顔を上げた。

その目には不安と、ちよつとした期待の色が浮かび上がる。

一度口を閉じ、そして決心したように彼女はその夢を語ってくれた。

「私は…私の夢は…誰を導く頂点となり、皆を導くウマ娘でありたい！」

全てのウマ娘が幸せになれる…そんな世界を作りたい！」

興奮気味に彼女は俺にそう自分の夢を、目標を聞かせてくれた。アメジストの瞳は潤み、息も荒い。手は制服の裾を握りしめており、彼女の不安や緊張が露骨に現れていた。

その姿に、自分の同志達の姿が重なった。

全ての亜人種と人間が、差別なく自由に暮らせる世界を作りたい…子供のように純粹で、青臭い思いで懸命に働く彼らの姿と、目の前の小さな彼女は同じ瞳をしていた。

人を突き動かし、社会に影響を与えるような大きな流れを生み出す人格者の瞳だ。

そんな者の夢を目標を。

夢物語などと否定するなど何故出来ようか。

「いいじゃないか。」

「ふえ…」

気が抜けた声で返すルドルフ。構わずに口を再度開く。

「全てのウマ娘の頂点に立つ。そして皆を導く。その為には君はレースに出て勝ち続けなければならない。勿論それ以外でも。」

茨の道だ。果てしない荒野を歩くようなものだ。

だけど君は、それを覚悟の上で決めたのだろうか？

ならば俺は…ルドルフ。

君を個人的にでも応援しよう。

できる範囲であれば君を支えよう。

君がこれから導く者達を全力で守り抜くことを、今ここに約束しよう。」

気づけば彼女の目には涙が浮かび、ボロボロと崩れ落ちていた。いく筋にも涙が頬を伝い、絨毯の上には落ちた跡が広がっていく。

「なんで…そこまでッ、言っつて、くれる、の?」

嗚咽混じりの震えた彼女の言葉に答える。

「君が本気で話してくれたからだよ。シンボリルドルフ。」

そう言うとルドルフはタカが外れたように、わんわんと泣き叫んだ。彼女自身の溜め込んだ不安や迷いを全て吐き出すかのように、1人の少女が泣いていた。

男は1人、これまでの彼女を労うように泣き止むまで優しくその頭を撫で続けた。

「いいじゃないか。」

「ふえ…」

予想しなかった答えに、間の抜けた声が出た。

なんで?なんで嗤わないの?

有名なトレーナーも、生徒会の先輩も、誰も彼もが無理だと話した私の夢を…

こんな小娘みたいな私の夢を、なんで貴方は笑わないの? まだトレーナーでもない筈なのに。

しかし少し話しただけでも分かった。

彼の我々に対する知識はそこらのトレーナーと変わらない。故にその道のりの険しさも知り得るであろうはずなのに。

応援すると。支えになると。私が導きたい者達を守ると。

誰も言ってくれなかつた言葉を、何故言ってくれるのだろうか？

視界が滲む。頬に涙が伝うのが分かる。

喉から漏れる声を必死に抑えたくても、もう無理だった。

「なんで…そこまでッ、言つて、くれる、の？」

絞り出すようにそう話せば、彼の琥珀色の瞳が優しく揺れる。

「君が本気で話してくれたからだよ。シンボリルドルフ。」

そう話す彼の言葉に、私は、自分の夢を諦めなくて良いのだと許された気がした。

声を上げて、誰にも見せた事がないくらいに私は泣いた。

目は腫れているだろう。喉も枯れるだろう。

それでも私は泣き続けた。

そんな私の頭を、彼はずっと撫で続けてくれた。

その慣れない手つきから彼の優しさを感じ、私は一層涙を流したのだった。

バケモノどもと、バケモノ

「…落ち着いたか?」

「…(コクン)」

ひとしきり泣いたルドルフはグシグシと泣き腫れた目を擦る。初見時よりもだいぶ幼くなった印象を受けるが、年相応だと個人的に思う。

受け取った資料を彼女と共に元に戻しながら、生徒会室を後にする。窓を見れば陽は落ちて藍色と橙のコントラストが空を染めていた。

「確か君たち生徒は学生寮で生活しているんだっけか? 門限もあると聞いているし、そこまで送ろう。」

「うん…ありがとうございます。」

スンスンと時折鼻を鳴らすルドルフ。

あれだけ泣いたのだから、完全に落ち着くまではまだ時間はかかりそうだ。しかし、憑き物が落ちたかのようなスッキリとした表情も見受けられ安心する。

この学園には美浦寮と粟東寮の2つがあるが、彼女は前者の方に住んでいるとのこと。

特に話すこともなく(というより話すネタもない)、2人は暗くなつた道を歩いていく。

少し肌寒い風が肌を撫でる中、異物の匂いを感じ取り歩みを止めた。

「どうした、の!?!」

急に立ち止まった彼の方を見るや否や、強引に肩を引き寄せられ、その場から離される。

次の瞬間、バサリと大きな音と黒い大きな羽が数枚空を舞っていた。

その羽の落ちてきた方向を見れば、信じられない光景に息を呑む。背中には一対の巨大な鳥羽色の翼。

頭にはフード、顔には鼻の長い天狗のようなマスクをしているその男性はゆつくりと地面に降り立った。

「ギーんねん。まさか奇襲がバレるとは。

なんで分かった?」

「匂いでそれくらい判断できる。それと此方に向けてくる異様な視線も合わされば余計な。」

こちらの肩を掴む彼の手に力が込められる。

目の前の状況を飲み込めずにいる中、彼らは変わらず話し続ける。

「あー…もしかして君もこつち側?そりやないぜもう来たのかよ。この学園も対処速いなあ」

目の前の仮面の男はだるそうに息を吐き頭を掻く。メンドくさいメンドくさいと何度も口にした。

「学園施設の破壊の次は…誘拐でも考えたか?この外道が。」

「まあねえ…その子有名な家柄出身でしょ?」

いいよなあこの学園は。その手の奴らからすれば宝の山。オレ達からすれば金のなる木さ。」

「ヒッ!」

此方を舐め回すような視線に全身の毛が逆立つ。

不気味な言葉と、異様な空気に息が苦しくなる。

一步、また一步と近づいてくるたびに体が後ろに下がろうする。

怖い…怖い、怖い怖い怖い!!!!

「ルドルフ、少し揺れるぞ。」

「え…きやあつ?!」

一瞬体が宙に浮いたかと思えば、ドン!という衝撃が襲ってくる。「オイオイ!ちよつと待てよゴリア!!!」

虚をつかれた仮面の男は怒りながらも、その大きな翼を展開させ羽ばたかせると一直線に此方に飛びかかってくるのが肩越しに見えた。

しかし、差は縮まらない。一步、また一步と彼が地面を蹴るたびにその速度は上がっていく。

めぐる回しに激しく変わる景色。

全力で追跡する彼から苦し紛れに聞こえる怒号。

そして耳に聞こえる風を切る音。

チラリと私を抱える彼の顔が目映る。

夜に浮かぶ月を思わせる、琥珀色の瞳の瞳孔は鋭くなり、人の耳ではなく狼のような獣耳。

「あなた、一体…」

「ああ、言つてなかったな。」

息を切らさずに喋る彼は此方の顔を見て、ニヤリと笑った。

「俺もあの野郎と同じ、バケモノさ。」

バケモノ。そう繰り返すように呟くと彼は「そうだ」と肯定する。

「まずは君を寮に送り届ける。流石にそこまで追つてこないだろう。あとちよつとの辛抱だからそのまま大人しくしていてくれよ?」

そう話す彼の言葉に黙って頷く。

状況は飲み込めず、頭はパンクしかけていたが彼の言葉は信頼できた。

そのまま彼の走りに揺られていれば、数分して見慣れた学生寮前に到着し、体を降ろされる。

「早く寮内に戻れ。」

「あなたは!?!」

「俺はアイツの始末に向かう。いいか、絶対に今日は部屋を出るな。常に誰かのそばにいる。

守れるな?」

両肩を掴み、そう警告する彼の言葉に頷く。

仮面の男のことも気にせず寮の中へと飛び込むように向かっていった。

「ルドルフ?どうしたのそんなに息を切らして…って何があったのよ!目も腫れてるし!」

偶然玄関に居た先輩ウマ娘は此方の顔を見るや否や駆け寄ってくる。

「ハッ…ハッ…!外に、彼が!変質者が!」

「彼?変質者?落ち着きなよ…外には誰も居ないよ?」

「え?」

安心したのか、緊張が切れてうまく呼吸ができないながらも先輩の指差す玄関の外に視線を向ける。

そこには彼女の言う通り、誰も居ない静寂な闇があるだけだった。

「痛い痛い痛いイイイ！離せ！離せよオイ！頼む離してくれ!!!お願いします!!!」

(クソ！クソクソクソ！なんなんだよコイツ!?)

先程まで上空を飛んでいた筈なのに！

地面を走るだけのこんな男に捕まる筈もないのに！なんで!?

オレがコイツに見下されているんだ!?

仮面の男は、ルドルフを抱えたまま走り去る男を結局追い切れることができなかった。

その事実にも驚愕したが、問題はその後だ。

彼女を置いて戻ってきた男は、走ってきた速度そのままにして上空にいるオレに向かって跳躍：脚を掴まれてそのまま強引に地面へと投げ落とされたのだ。

そのまま押し倒され、左腕と右翼の関節部分を掴まれている。最悪なことに、男の鋭い爪が易々と肉を突き抜けており、生温かい自分の血が自身の体を濡らし始めていた。

「チクショウ！お前 “人狼種” だろう!?

なんでこの学園なんかにいるんだよ！可笑しいだろ!?

「お前らが目立った行動を立てるから引つ張り出されたんだよ。お前は “天狗” …その中の一種 “烏天狗” だな。

いくつか質問をする。 “はい” か “いいえ” で答える。さもなければ…分かるな?」

握られた箇所さらにさらに力を込めてくる人狼に、烏天狗はコクコクと頷くことしかできなかった。

その顔には恐怖と激痛によってもたらされる苦悶の表情が濃く浮かび上がっていた。

そんな男をよそに、人狼は質問を開始した。

「学園への妨害工作の犯行はお前を含め数人で行った。」

「…はい」

「お前らはウマ娘やそれに関わるヒトに関する反行動組織及びそれに従する団体である」

「…はい」

「過去に学園内のウマ娘を誘拐したことがある」

「…いいえ」

「誘拐の雇い主は…ここに投資しているスポンサーの1人である」

「…はい」

その答えに人狼は舌打ちをする。翼と腕から肉と骨が軋む音が響き激痛が体を走る。

「がああ、ああ、っ!!!」

「最後だ。お前らは今夜も犯行に及ぼうとし、既に学園内に侵入している」

息も絶え絶えにしている烏天狗に最後の質問を尋ねる。しかし彼は此方の顔を見るとニヤリと目を歪ませた。

「くたばれバーカ」

「ああ、お前がな」

グイツと引つ張られると同時に、烏天狗の頭は何者かに思い切り殴られていた。

「ギャアアアアアッ!!!」

仮面は落ち、血と折れた歯が地面に落ちる。

痛みについてのうち回る中、人狼は既に新たな敵に視線を向けていた。

身長は2メートル近くあるだろうか。レスラーのような屈強な体格をした新手は此方を見ると同時に変身する。

茶色く分厚い毛並み、重厚な爪、筋肉質な腕、肉厚な体…熊の形態を取るその男もまた亜人種だった。

「熊人間か」

そう彼の正体をいうと同時に、巨大な熊人間は四つ足となると此方に突っ込んでくる。

(体重差があり過ぎるな…肉弾戦は不利。ならば)

ガチャガチャと腰のベルトをはずしながら、突っ込んでくる熊男の

肩を踏み、空中で身を翻す。

その際にベルトを彼の首に回すと、勢いよく締め上げた。

「カハツ：ヴオオオ！」

一度喉から息が漏れるも、熊男は此方を振り払うように暴れ回る。壁に、地面に背中から体当たりし、此方を押しつぶそうと躍起になる。

「イッテえな！きつきとオチろ：い！」

体中に衝撃と痛みが走る。ごぼり、と口の中に鉄の匂いと酸味が広がる。

それでも、振り払われないように彼の背中にピタリとくつつき、ベルトと彼の腹部に回す足に更に力を込めて拘束し続ける。

10分は続いただろうか？激しい互いの我慢比べが続く中、熊男はフラリと大きくよろめきそのまま地面に倒れた。

変身は解かれ、泡を拭き白目を剥いている彼の首にはクツキリとベルトで拘束された跡が残っている。

「流石熊：噂通りの頑健さだな。」

口元の血を拭いながら地面に倒れる熊人間の生存確認をしつつも、周りを見る。

逃亡させたかと思っていた烏天狗の男は随分と離れた場所にあるが、ことくれたのか地面に倒れていた。翼も随分と小さくなり背中に収まっていた。(片方は血で塗れ少し変形している。)

周りを見渡し、戦闘痕の処理を考えながらポケットから端末を取り出す。相手は昼頃に別れた上司の年藤だ。

「銘無、何かあったか？」

「犯人格2人を確保。後処理諸々のために人員をお願いします。」

そう話せば電話越しに「ハア!？」と驚いた声が聞こえる。昨日の今日で犯行が起きるとは誰も思っていなかったし、俺だって内心驚いている。

「まあ：実際に起きているしな。分かった。学園に向けて救護班も向かわせよう。たづな達には私から連絡を入れるから、お前は犯人2人を見張っておくように。以上。」

そう言うのと彼女から電話を切られる。

絶えず転がる2人の靴紐やベルトなど拘束できそうなものを一頻り剥ぎ取ると、手首や足首、腕などをぐるぐる巻きにして身動きを封じた。

周りを見渡し、鼻で匂いを嗅ぐも近くには誰もいないようだ。逃げたか、最初から2人だけだったのかは分からないがとりあえず今夜はここまでだろう。

(一応学園内の搜索もしておくか…：新手がいても困るしな。)

取り敢えず、休憩だ。

戦闘が終わり腰を下ろす。人狼化も解いてヒトの姿に戻り、月の登る夜空を見上げた。

暫くすれば年藤さんが連絡をよこしたであろう連行班と救護班、後処理部隊。そして理事長とたづなさんが現場に現れる。

2人に今回の内容を伝えている間に犯人は迅速に運ばれ、後処理の済んだ報告を受ける。

「本当に、亜人の方による犯行だったのですね。」

「喫驚…そして感謝。ありがとう銘無くん。初日からの活躍大義である！これからも協力してくれると嬉しい。」

未だ状況を飲み込みきれないたづなさんに対し、理事長の方は笑ってそう話しかけてきた。見た目は幼いが流石はこのトレセン学園のトップということだけはあはる。

「ええ…此方こそ。」

今日一日だけで目が回るような程の内容に、流石に体が重い。

明日以降の打ち合わせを簡易的に済ませると、寝泊まりするならばと空いているトレーナールームに案内された。

ホワイトボードやロッカー、事務作業のできるようトレーナー用の机と椅子、奥には仮眠用のベッドやちよつとしたコンロや水道まで付いている。

(最悪ここで暮らせそうだな…：どんだけ金あるんだこの学園)

チームを持つトレーナーにも対応している為このような形となったが、1人では少し持て余すくらいだ。

案内してくれたたづなさんに礼を言い、仮眠ベッドに身を投げ出

す。血や汗を流したかったが少し眠りたい。

重くなる瞼に従って目を瞑る。

そのまま意識を手放すのにさして時間は掛からなかった。

バケモノ研修生

「お〜い君！今度はこっちの機材を頼む！」

「はーい！」

あのルドルフ誘拐事件（未遂）から数週間が経ち、本格的なトレーナー研修制度への参加するようになった。

レース学、運動栄養学、メディア対応、ウマ娘の体内構造や生態、怪我への対応と事細かな座学。そして現場では実際のトレーニングメニューの組み方やウマ娘達とのコミュニケーション、各トレーニングルームの使用条件なども活躍しているトレーナー達から指導を受けている。

場合によっては早朝からウマ娘達のトレーニングに駆り出されることや、遠征でレースを直接見る為に付き合うこともしばしばあるとのこと。

気力体力共に削られ、覚えることだらけではあるが今まで感じたことのない体験に内心ワクワクしている自分もいる。

（まあ上司達含めて推されているし、ルドルフに応援すると言った手前半可なことはできないしな。）

その後、ルドルフは紆余曲折を経てトレーナーを見つけることができた。

冷静沈着な判断と、徹底した指示の遵守をウマ娘に求める学園内でも屈指の女性トレーナー「東条ハナ」通称「おハナさん」である。

何度か研修でも話したことがあるが、厳かかつ自分にも他人にも厳しい人ではある。

しかし担当しているウマ娘達はメキメキと実力をつけ、彼女らの可能性を限界まで高めようとする熱意もあってその信頼は厚いものであった。

研修生間でも些細な質問や悩み事を一人一人丁寧に聞き、的確なアドバイスをくれることから人気も高い。

まあ時折とてつもない難題を突きつけてくることもあるが：流石は最高峰であるトレセン学園のトレーナーということにしておこう。話は逸れたが、ルドルフとの相性は非常に良く毎日おハナさんのトレーニングに励むルドルフの実力はさらに磨きがかかっているとのことだ。

「俺も頑張らなくてはな：最短2年で資格取るくらいでなければ顔向けもできん。」

資格を取ること自体はどうかなるかもしれないが、ここトレセン学園の専属となると訳が違う。

地方で実績を出したトレーナーや、名門校や名家からの出身者。年齢問わずにトレセン学園でのトレーナー資格を狙う者はごまんといる。

中にはその狭き門に何度も弾かれる。もしくはその過程でストレスで発狂する者も稀にいと聞くが：トレーナーになった後もその可能性はあるのでなるべく気にしないようにしている。

というよりもウマ娘関連でそのような事案に陥った場合、十中八九止めるのは自分である。勘弁して欲しい所だがそれも仕事なので文句は言えない。

(まあ内部で起きている分気付きやすいし、敵わない訳ではないからどうかなるが心は痛い…)

現に何度か諸々の理由によりトレーナーとウマ娘のいざこざやら、俗に言う「うまぴよい」での強制的に肉体関係を持ってフリーのトレーナーを狙う脅迫紛いなことやらに直面し、表立たないよう暗躍している。

一応今はまだ事件が多発する時期(そもそも多発するなど突っ込みたいのだが)ではない為、比較的個人の時間も確保できている。

「うん：今日のところは終わりかな。」

また明日もよろしく頼むよ。お疲れ様。」

「はい、お疲れ様でした。失礼します。」

夕方となり、初老の先輩トレーナーが今日の業務が終わったことを伝えられ礼をしてその場を去る。

途中に破壊された練習レース場を見返せば走る分には問題がない程整備し直されており、今も多くのウマ娘達がトレーニングに励んでいるのが目に写った。

結局烏天狗のやつがあらゆる事をゲロった為、ウチの組織の尽力もありレースを荒らした奴らは捕まった。とは言つてもほぼほぼゴロツキの寄せ集めのようなもので、有力な情報はこれといって集まることはなかった。

更にルドルフを誘拐するように依頼したスポンサーも表社会に晒され、契約は解除。しかも大手企業のトップ層であったことから、この株は大暴落、今や大赤字である。

アレ以来外部による目立った時間もないし、平和と言えば平和な日々が続いていた。

「銘無研修生！」

「ンア!？」

ありきたりな平和を噛み締めていると腰あたりに衝撃が走る。突然のことに驚かされるがそのまま後ろに向き直れば、見慣れたアメジストの瞳がこちらを見上げていた。

「やっぱりルドルフか。練習終わり？」

「はい！」

「そうか、お疲れ様。」

ニコニコと笑うルドルフの頭を撫でる。

嬉しそうに尻尾を振り、目を細める。

もつと撫でると頭を手に押しつけてくる辺り、あの一件を通して随分と親しくなったものだ。

「まだこれからトレーニングか？」

「今日は終わりです。そちらは？」

「夜にいつもの見回りがあるから、それまでは課題でも済ませるさ。終わるといいけれどな。」

「それは…お疲れ様です。」

ルドルフは俺が人狼であることや、個人の仕事を学園から請け負っ

ていることを知っている唯一の学生だ。そしておハナさんの所にも何回も研修などを通して顔を見ているから此方の予定や仕事など想像しやすいのだろう。

こつちからしてみれば、労いの言葉を掛けてくれるだけでもありがたいものなのだがなあ。

そう思いつつ彼女の頭を撫で続けていけば、ルドルフの小さな両手が此方の腕を掴み動きを止めてくる。

(ん?)

どうしたのかと彼女の顔を伺えば、頬を赤くし耳はへにやへにやと倒れていた。

周りに意識を向ければ興味ありげな視線が此方に集まりつつあるのを感じる。「何あれ、カワイイ〜」「仲良しねえ」なんて声も聞こえてくる辺り、恥ずかしくなってしまったのだろう。

先程までは人があまり居なかったし、ルドルフもそれを承知で突っ込んできたのだが、トレーニング終わりの学生が増えてきたのが原因だ。

「そ…それではこのあたりで失礼します…」

「うん。お疲れ様。」

まだ頬を赤くしたままルドルフは早足に去ろうとするが、此方が手を振れば小さくと振り返ってきた。相変わらず律儀な娘だ。

すっかりとグラウンドに差し込む夕陽は傾いていた。門限も近いだろうし先に見回りをしてしまおうか。

ゴソゴソとシャツのポケットから鎮圧団体を示すバッジを取り出し身につける。見回り時には目のつく所に行っていた方が色々やりやすい。

「さて、いきますか」

息を一つ入れて、気持ちを切り替える。

トレーナー研修員 対亜人種鎮圧員

そして2年後には中央トレーナー資格への取得

やることだらけではあるが、色々と飽きることはない。不慣れなこととも多いが、学園側から用無しと言われるまではやれることはやろう

ではないか。

流されるように決められた新たな自分の職務も、満更でもないかの
ように彼は小さく笑った。

そして時は流れ：怪物と言われる存在達とこのバケモノは出会う
ことになるのだが、それはまた先の話。

春、桜の花が学園に咲き誇り柔らかな陽射しが大地を照らす。

厳しい選抜レースを勝ち抜き、ここトレセン学園のいう偉大な学舎に足を踏み入れた新入生の顔は緊張とこれからの将来に、出逢いに対しての期待や喜びが浮かんでいた。

そしてそれは、学生だけではなく中央トレーナー資格を勝ち取った者達も同様であった。

ピカピカのスーツに、胸に煌めくトレーナーバッジ。これから出会うウマ娘と2人3脚、人バ一体となって「トウインクル・シリーズ」果てはその先へと進まんとする道のりに誰もがその目に希望と挑戦する意気込みを燃やしている。

そんな彼ら、彼女らは今トレセン学園の体育館にて理事長からの激励を受けている最中であった。

そんな平和な学園の中の、祝いの場が開かれる中ある男は別の場所に立っていた。

正確に言えば、現在入学式が行われている体育館の物陰である。

目の前には、既に鋼鉄製のワイヤーで拘束され気絶している数名の男女が地面に横たわっていた。

そして彼らが所持していた銃火器、武器、火薬類などもまた男の足元に固められていた。

元々ワイヤーも彼らの所有物である。倒した後に回収して利用させてもらった。

「全く、よくもまあ上手く紛れ込んだものだ。今回は…珍しい、ドワーフと人の混血種か。コイツは単眼…サイクロプスの血が混じっているな、大分小柄だが。後は全部ヒトか。」

彼らの匂いからヒト種とそうでないものを判別し、後は外的特徴からそれぞれ種族を仮定する。

そんなことをしていると後ろから聞き慣れた足跡が複数聞こえてきた。

「やあ、初日から不運だな。銘無トレーナー？」

「まあ…これも仕事ですから。」

振り向いた先にはいつもの帽子を被り、スーツを来た自分の上司・年藤さんが立っていた。

後ろには警備員とウチの組織の輸送班のメンバーが揃っていた。

「他の面々は？」

「念のため学園内の見回りをさせていますよ。あとコイツらに倒された警備員らも病院へと搬送済みです。命に別状はないかと。」

犯人らが組織のメンバーらに連行されるのを横目にしつつ、短くそう伝えれば年藤さんは突然こちらを抱き締めてきた。

「…何すか？」

「少しは照れた素振りを見せないか。面白くない…」

やれやれと彼女は離れると、今度は頭を両手で撫でてきた。それも満面の笑みを向けて。

「改めて、中央トレーナー試験合格おめでとう、銘無！たづなからもよく話は聞いていたけど…頑張ったな。」

薄らと彼女の茶色の瞳には涙が浮かんでいた。

ずっと実の弟のように育ててもらったようなものだから、此方としても嬉しい限りだ。

しかし既に成人を超えたばかりの男の頭を撫で回すのはやめて欲しい。仕事を終えた警備員の方や組織の顔見知りの方らの温かい眼差しが向けられているのを感じ、恥ずかしくなる。

それを察したのか、年藤さんも撫でるのを止めてくれた。

「今後はどうする？早速新しい娘のトレーナーになるのか？それとも誰かの下でサブトレにでもなつて実績を積むか？」

「ありがたいことに研修期間に面倒みてもらった方々からお声掛け頂きました…取り敢えずおハナさんのお世話になりますよ。」

研修期間中にルドルフとの繋がりもあつた為に一番お世話になつたおハナさん。彼女にも試験合格の報告をした後、「私が…チームリギルが直々にお前の面倒を見てやる！」と祝いの酒の席で言い放つたのだ。

他にお世話になった黒沼、南坂トレーナーはそれを聞きクツクツと抑えるように笑い、沖野トレーナーは「オレも面倒みたい！」と抗議

してくれたが、じゃんけん3番勝負でストレート負けした。

他にも何人からお声がけ頂いたが、その方々にも他の新人トレーナーがお世話になることが決まっている。

因みにおハナさん呼びはルドルフや、彼女のチームメイトの娘らがそう呼んでいるのが移り、気づけばそう呼んでいた。怒られた事はないのでそのままにしている。

「おハナさん…ああ、東条トレーナーか！皇帝や怪物含め有名バを輩出しているやり手の有名な方だね。まあサブトレだつて立派なトレーナーだ。しっかり励むようにね。」

それじゃあ私はこの辺で。報告書も出すように。」

そう言うのと彼女は踵を返し、手を振りながらその場から離れる。「今度は他のやつらも連れてくるから〜！」と届いた声は聞こえなかったことにする。

さて、この後はどうするか？

時計を見れば式に戻るにしても半端だし、そもそも先程まで戦闘していたことから、汗や血などの臭いのついた自分が入れば嗅覚の鋭いウマ娘達から警戒される事は間違いない。

「しょうがない…このままサボるか。」

悩んだ末に、そう思いつく。今頃戻る必要も殆どないだろう。のちにお叱りを受けたとしたら、甘んじて受けよう。そんなことを思いつつ春らしい暖かな光と気持ちの良い風を感じるままに歩き始める…そんな時だった。

「おい、アンタ…何やってる？」

不意に声をかけられ、足を止める。

声のした方を見れば少し離れた廊下から1人の学生ウマ娘がいた。切り揃えられた長い黒鹿毛は縄で結われた後、腰まで下されている。鼻には鼻腔テープが貼られているその娘の月のような瞳が此方を見据える。

「…学園内の見回りだよ。君は？」

「アンタに話す義理はない。」

「此方が質問に答えた分、君も答えるのは自然なことではないかな？」

彼女の方に近づき、そう返すと彼女は小さく舌打ちをするも、不機嫌そうに答えてくれる。

「…トイレと言って抜け出して来た。退屈してきたからな。少ししたら戻るさ。」

要するにサボりか。そして偶々歩いていた矢先にトレーナーバッヂをつけている俺を見て不審に思い声をかけた：そんなところだろう。

「アンタは…：そうか、噂に聞いた個人で動いている対ウマ娘鎮圧団員はアンタのことか。ご苦労なことだな。」

此方の胸につけたもう一つのバッジに気づくと彼女はそう話してきた。噂で流れるまでになるとは…：行動を改めなければならぬな。

というか、なぜ彼女は知っているのだろうか？

「君、名前は？俺は銘無…：新人トレーナーになったばかりの者だ。」

目の前の彼女が気になり、自己紹介を兼ねてそう話せばそのウマ娘はため息を吐きながらも答えてくれた。

「今後関わることもないとは思いますが…：一応言っておこう。ナリタブライアンだ。」

そう話す彼女の瞳はどこか、諦めと一縷の望みを混ぜ合わせたような色を滲ませていた。

バケモノの誘い

「トレーナーの言うことを聞かない？」

「ああ、そうなんだ。」

入学式から数週間後。自分の担当バ達のスケジュールやトレーニングメニューをまとめながら、眼鏡をかけたスーツ姿の女性、おハナさんは手に持つバインダーに視線を向けたまま話しかけてくる。

話のネタは、選抜模擬レース前から各トレーナー達にその名を知れ渡っている1人―「怪物」とさえ言われているウマ娘、ナリタブライアンだ。

「少しでも名の売れたウマ娘に声をかけては模擬レース。夜には周りの声も聞かず1人で自主練を行う…その繰り返しだ。誰も彼も彼女に声をかけるが、それを全て断っている。」

「自己流で勝てるからトレーナーなど要らない、と言う感じなのですか？」

「いや…私も聞いた話だから断言はできないが」

バインダーから視線を上げて、目の前のターフで走る教え子（教えバ？）らを眺めながらおハナさんは再度口を開く。

「物足りない。彼女は決まって悲しそうに、そう話すんだ。」

「…」

「ハッ…ハッ…この、バケモノ…！」

ああ…またか。またなのか。

膝をつき、芝を握りしめながら、震えた声細く呟く彼女を、私は黙って見下ろす。

距離は2000、右回り。良バ場、晴天の下での模擬レース。

中距離が得意と言いつ、実際に校内レースや公式の試合でも勝ちを重ねていると聞いていたのに…結果はこれか。

弱かった訳ではない。ラスト600まで相手は6バ身の差をつけて先行していた。此方が外から抜こうとしてもそれに合わせて、塞ぐように立ち回り中々抜け出せなかった。

面白い！そう思い地面を駆ける足に力を込めて、私は加速した。全力を出せると思ったからだ。

目の前で走る相手を喰らい尽くしたい、拗らせたい本能のままに彼女の背中に狙いを定める。

（まだだ。まだ私を抜かせるな。前を走れ、走ってくれ。この熱を、渴きを満たしてくれ！）

願いに近い感情を胸にするも、彼女の背中は近づき、遂に抜き去る。

その刹那。見てしまった。

私に怯え、闘志の火が消えてしまった彼女の顔を。

（ああ…お前もか）

結果としては、3バ身半の差をつけて私の勝ちで終わった。だが、私の心は何も満たされない。レースで走った後だと言うのに体も心も冷めきってしまったているかのように重く感じる。早くこの場から去りたくてしょうがない。

そんな事は知らず、また勝手に集まっていたトレーナー達がターフを出た私を囲んだ。

「凄いわ！終盤の加速、追い上げなんてデビュー前とは思えない！貴女ならシンボリルドルフ以来の三冠も狙える！是非ウチに来て頂戴！」

うるさい

「ウチのチームは環境も良いし、重賞バも出ている！トレーニング施設だって優遇して貰えるし君が望めば色んなレースを組もう！」

うるさい…うるさい、うるさい！

此方の気も知らず、我先にと勧誘してくるトレーナー達の声に苛立ちが詰まる。だが、彼らに手を出す事など出来るはずもなく、顔を伏せ唇を噛む。ジツと耐えるしかなかった。

早く立ち去りたいのに、彼らが邪魔で思った通りに進めないことがさらに腹ただしい。そんな時だ。

「楽しくないだろ、走るの。」

「は？」

男のその一声に、私は顔を上げた。琥珀色の瞳に真つ黒な髪のは、一度見たことのある奴だった。今回は、スーツじゃなくてジャージだった、何故か覚えていた。

「アンタ、入学式の時の……」

「少し話をしたい。まずは……場所を変えようか？」

他のトレーナー達がいると言うのに、彼は笑って話す。此方が断るなんてことは思ってもないように。

「だけど、この場を早く去りたい私からしてみればありがたい話だった。」

「分かった」――そう返そうとした時だ。

「き、君！待ちたまえ！」

一人の男性トレーナーが彼奴の肩を掴み、足を止めさせた。そいつの顔はよく覚えている。何度も私のレースを見に来ては勧誘してくる中堅トレーナーだった。

「君、分かっているのかな？今、私たちは勧誘していたのだよ。ずっとだ。それをいきなり現れて、君が持ち去るなんて許されるはずないだろう？」

君はまだ新人トレーナーだったな……研修で見たことある顔だ。覚えていてよ。

今引くなら……なかったことにしてあげよう。」

言葉こそ優しいが、目には怒気が籠っている。肩を掴んでいる手にも力が込められていた。

この学園だけではないが、優秀なウマ娘ほど実力のあるトレーナーの下に集まる。その方が色々と都合が良いからだ。

と言うよりも、せつかく日本最高峰の環境に来たのに、新人と組まされて結果も出さず退学なんて笑い話にもならない。皆、それを恐れているし、仕方ないと割り切っている新人トレーナーだって沢山いる。

何より、先輩トレーナー達を差し置いて優秀なウマ娘の担当になった日には今後どうなるのか分かったものではない。内心それを恐れ

ている奴らばかりだ。

「ええ、それが？」

「なっ!？」

肩に置かれた手を掴み、振り返りながら彼奴は先輩の方を向く。頭ひとつ程大きい彼は相手を見下ろしながら淡々と話し続ける。

「確かに、あなた方を差し置いて私が声を掛けたのは失礼でした。しかし、毎回のようにレース終わり、気持ちの昂っていうウマ娘である彼女を囲むのは如何でしょうか？」

何度も何度も同じ方々に逃げ場を失くすように囲まれば、領いて貰えるものも領いて貰えません。

ここは一つ、気まぐれのつもりで私に任せて頂けませんか？貴方方は皆実力もあり、名の知れ渡ったトレーナーばかりです。たかが新人1人、怖いはずがないでしょう？」

馬鹿にする訳でも、挑発する訳でもない。

ただ正論を話す新人の言葉に、周りのトレーナー達は気まずそうに目を逸らした。

そしてそれは、目の前に立つ彼も同様だった。

「あ…ああ。そうだ、そうだな。」

偶には、新人に譲るのも悪くない。」

ぎこちなく笑う男に、ニコリと張り付いたような笑顔で彼奴は返し、私に視線を向ける。

「それでは行こうか。」

「ああ、分かった。」

何事もなかったかのように歩く彼奴の後を追う。私を囲んでいたトレーナー達は先程までの事が嘘のようにスナリと私を通してくれた。その様子に胸がスツとしたのは内緒だ。

「良かったのか？」

「何が？」

「とぼけるな。先程の件だ。」

案内された学園の屋上で、道中で買ったスポドリを受け取りながら

質問する。

「あんな事をして、タダで済むとは思えん。アンタがそれで良いなら良いんだがな。」

言い終えてから、ペットボトルの蓋を開け、一気に半分ほど飲み干す。レース直後で水分を欲していた体によく染み渡る。彼はそれを見て笑っていた。

「なんだ？」

「いや、噂だと一匹狼だと聞いていたからな。俺の身を案じてくれるなんて随分優しいなと思って。」

「そう言う訳じゃない…あの場から逃がしてくれたのは事実だ。心配くらいするさ。」

ハア、と溜息を吐く。アレだけの先輩トレーナー達を前にあんな事を言ったのに、今後が怖くないのだろうか？策があるのか、それともバカなだけなのか。

「まあ、俺の事は気にしなくて良い。それよりも、お前の方が大事だ。」

「ふん、お前に心配される事など…」

「楽しくないだろ、走るの。」

「…なに？」

先程も聞いたその言葉を聞いて彼を睨む。耳が絞られ、後ろを向いているのが分かる。それなのに目の前の男は手の中のコーヒー缶を回しながら話し続ける。

「さっきのレース見てたよ。ナリタブライアン。確かに君は強い。噂通りだ。でもそれだけだ。」

相手への敬意もなければ、レースに対しての熱量も感じない…と言うより、全力で臨んでいないだろう？いや、できないと言った方が正しいか？

そんな奴が、どれだけレースを走ったとしても楽しいと思えるはずがない。実際に走ってるお前の姿は酷く退屈で、悲しそうだったよ。

なんでこの学園に来たのか、不思議に思うくらいに、な—

ガシャン！と屋上の金網が大きく揺れる。

気づけば私は彼のジャージを掴み、金網に押し込んでいた。それが

なければ突き落としていたかも知れない。

「グッ……」

「フーツ！フーツ！」

苦しそうな彼の声が聞こえる。ギリギリと彼のジャージを掴む。ああ、このまま首を締めてしまいそうだ。それくらい今の自分は怒っている。

「お前に……お前に何がわかる！私の渴きも！絶望も！全力で走れないことも！誰にも理解されなかったこの気持ちも！何がわかる!!!」

ガシャン！ガシャン！と大きく金網が揺れる音が響く。首が絞まっているせいか、彼は何も話さない。返してこない。返ってこない。

あ、しまった。そう思った時には遅かった。

そうだ、相手は人間だ。

ウマ娘である私が怒りに任せて力を振るえば、その命を簡単に奪うこともできてしまう。

ヒュツ、と口から息が漏れる。冷や汗が背中を流れる。

「おい、勝手に殺すな。」

「イタツ!？」

パチン！と良い音が響く。鋭い痛みにも額を抑えながら前を見ると、やれやれと言った風に目の前の男は服装を直していた。

「アンタ……何ともないのか?」

「ん?まあ多少は苦しかったけど別に。俺も君を怒らせてしまったみたいだし、お互い様ってことで良いんじゃない?」

ケロツとしている彼に頭が追いつかない。

何なんだこいつは……単に頑丈なだけか?いや、そんなことよりも、謝らなければ。

「その……すまない。初対面なのに、アンタに酷い事をした。許されることではないと思うが……」

「気にするな……と言いたいところだが。うん、そうだな。」

「なんだ?やはり何かあるのか?」

顎に手を置いて、彼は少し考えた素振りを見せると口元に笑みを浮

かべてある提案をする。

「二つ、競争してみないか？相手は…俺がしよう。」
「…ハア!？」

驚く私をよそに、彼は悪戯っぽく笑うのだった

駆ける2人

日が沈み、藍色に染まる空。ターフの上は少し肌寒い風が吹き渡る。

普段なら誰もいないその時間に、今日は珍しく人が集まっていた。興味、感心、心配、呆れ：様々な感情を込めた視線はターフの上の2人に向けられる。

1人は、言わずと知れた有力バツナリタブライアン”。そしてもう1人は、新人トレーナーになったばかりの銘無だった。

「本当に銘無さんが走るのですか？あのナリタブライアンと。」

「私が聞きたいくらいですよ：ハア、頭が痛い。」

観客エリアから心配そうに質問するたづなに対して、頭を押さえながら東条トレーナーは何度目か分からない溜息をつく。

(全く：夜間のターフ使用許可を欲しいと言ってきたから何をするかと思いきや。)

ナリタブライアンの話をした後、彼は今日も行われた模擬レースを観に行ってしまった。

まあ仕事も特別急ぐものもなかったのもそのまま行かせてしまったのだが、まさかそこから戻ってきて開口一番に「今夜、模擬レースを行いたい」と来るとは思わなかった。

しかも走るのはウマ娘ではなくて、彼本人だという。確かに対ウマ娘鎮圧員である彼は私達一般人とは身体能力は比べ物にならないだろうが、相手は何も鍛えていない普通のウマ娘でさえ成人男性の3倍以上の身体能力を持つ。

そんな彼女らとレースをするとなれば、勝負にすらならないことは簡単に予測できる。

それなのに、私の反対意見になかなか折れない彼に対して助け舟を出したのは私のチームの1人、*“皇帝”*の二つ名を持つシンボリルドルフだった。

「銘無トレーナーとナリタブライアンの模擬レースですか？何も問題はないかと思えますよ。きつと理事長達も承諾するでしょう。」

トレーニング終わりのミーティングのために、偶々その場に入つて来たルドルフは事情を話せば、一寸の迷いもなく、そう言い切った。「私は彼の走りを見た事があります。それに、もしかしたらナリタブライアンを救う一つの糸口になるかもしれません。どうか私からもお願いしたい。」

そう言つて頭を下げるルドルフを見て、私の方が折れてしまった。そして必要な書類をたづなさん経由で理事長に渡したら、即OKが出たと聞いた時は耳を疑った。

「たづなさんも…よく承しましたね。いつもなら理事長の気まぐれを止めてくれるかと思つてましたよ。」

「まあ…いつもならそうですが。今回ばかりは私自身の好奇心が勝つたと言いますか…ごめんなさい。」

目を逸らし、申し訳なさそうに話したづなさんにまたため息を吐く。ストップパーである彼女も賛成してしまつては最早誰も味方してくれないだろう。

しょうがないと割り切つて、私は改めてターフの上に立つ2人を眺めるのであった。

「…本当にアンタが走るんだな。」

「中にはレースを控えているウマ娘だっているからな。何かあつては困る。今回は俺で我慢してくれ。」

「チツ…」

ウォームアップ前のストレッチをしながらそう話す彼に小さく舌打ちをした。

(バカにしているのか?それなりに鍛えてはいるみたいだが所詮は人間…私達とは身体能力が違う。)

日中助けられた身としては断る事ができないとはいえ、こんな形では余計自分の渴きは満たされないだろう。鬱憤が溜まりイライラとしてくる。

そんな私を無視して、今度は彼から話を切り出して来た。

「ただ模擬レースを走るのもつまらん…一つ条件をつけるか」

「条件：う？ハッ！確かにな。なんでも良いぞ？時間差か？距離か？何をしても勝負にすらならないと思うがなー」

「10バ身」

「…何だと？」

聞き間違いか？そう思ったが彼はもう一度同じことを話した。

「レース中、10バ身相手から離された時点で負けとする。その際、勝敗が途中で決まってもレース自体は最後まで走ってもらうがな。」

ああ、レース内容は昼間君が走っていたものに合わせるつもりだ。マイルは兎も角、短距離は君に向いてなさそうだしな。どうせ走るなら互いに得意なモノが良い。」

「正気か？ウマ娘の速度を知らないわけではないよな？一応アンタもトレーナーだ。」

「中長距離なら時速54〜60キロってところか？ラップなら12〜13秒だ。まあ確かに速いが…勝負出来ないほどではない。」

それともビビっているのか？今ならまだ辞めることもできるが…どうする？」

ブチッ

私の中で何か切れる音が聞こえた。それと同時に煮えたぎっていた熱が下がり、逆に頭が冷えてくる。

目障りだ。もう2度と観たくない。ならば…私の取る手段は一つだ。

「いいだろう…それほどの自信があるならば、さぞアンタは速いんだろうな。」

「ならば私からも一つ提案だ。アンタが負けたら…この学園から出ていけ。いや、それだけじゃ物足りない…トレーナーバッジも何もかも捨てて貰おうか。」

静かな怒りと、殺意を込めた低い声が響いた。

観客エリアで何人か目を見開いていたが、知ったことか。

「いいぞ、それで。」

「…！」

「さて、互いに体も解れたことだ。そろそろ始めるか。」

あつさりと。プレッシャーも何も感じさせず男は私の横を通り過ぎ、スタート位置へと向かっていく。

私は一瞬思考が止ままたのち、腹の底から熱いモノが込み上げてくる感情と共に奥歯を噛んだ。

「あらら…ブライアンちゃんお怒り気味ね。あれだけの事言われたら無理もないけど。」

ターフの真ん中から、2人を眺めながらそう話すのは、ルドルフのチームメイトであり同学年の「マルゼンスキー」だった。

「確かに。しかし、普段の銘無トレーナーならあんな事は言わないさ。」

「作戦って言いたいの？ だけど流石にムリなんじゃない？ ウマ娘相手アタシたちに10バ身つけて勝てたら、彼はもう人間じゃないわよ。もしそうなら、面白いけどね。」

そう話すマルゼンスキーに対して、ルドルフは「ふふっ」と小さく笑った。

「どうしたの？」

「何、君のその意見はあながち間違いではないと思っただけだよ。」

「…ジョーダンによしこちゃん、よ。さて、じゃあ私はスタート位置に行ってくるわ。ゴール役よろしくね♪」

スタート旗を片手に彼女は2人のいる方へと向かう。その姿を見つつ、ボソリと呟いた。

「冗談ではないさ。すぐに分かる。」

数分後、目の前のゴールを最初に迎えるのが彼であることを願いながら私もまたゴール位置に向かっていった。

「最後に今回の内容の確認よ。距離2000、右回り、良バ場。途中10バ身離された場合も負け。その際でもゴールまで走り切ること。」

そして…銘無ちゃんが負けたらトレーナーバツジを返却、この学園からも去る。2人ともそれで良いわね？」

「ああ」

「異論なし」

「そう…じゃあ、悔いのないようにね」

2人の返事を聞き、マルゼンスキーは静かに息を吸う。

「只今より、ナリタブライアンと銘無トレーナーの模擬レースを開始します。」

凜とした声がレース場を通る。

緊張が伝わりピリピリと空気が張り詰める。

レース、スタート

バサリと旗が振られると同時に、2人は勢いよくスタートを切る。

「なっ…!!?」

そして直後の光景に、周りも…そして共に走るナリタブライアンも声を上げた。

駆ける2人 2

「また負けた!」

「アツハツハ!当然!走りに関しては私の専売特許ってね。」

ふと思いついたのは、昔彼女と出会ったばかりのこと。当時組織に入ったばかりとはいえ、彼女の身体能力…こと走ることに関しては頭ひとつ抜けていた。

きつかけは忘れたが、なんかの拍子で彼女と競争することになって、負けた。そこから何回か戦うも、全敗していた。

「まあそう落ち込むな。現役時代でもお前ほど私に迫るものなんていなかったよ。まさか1バ身以内にまで追いつかれるなんて夢にも思わなかった。」

「それでも勝てなきゃつまらない!」

まだまだ幼かった俺は、そう喚いて彼女をよく困らせたっけ?

「分かった。分かった。じゃあもし、お前が今後私みたいなのとレースすることがあった時の為の作戦を教えよう。」

「作戦?」

「そう、作戦…といってもやる事はシンプルだけど。」

優しく俺の頭を撫でながら彼女は人差し指を立てて話してくれた。「お前の持久力は私達よりも優れている。」

だから、最初から最後まで。全速力で駆け抜けてしまえ。

速度は敵わなくても勝手に相手がバテるはずだ。」

所謂、大逃げというやつだな。

当時は、ウマ娘に関わるような言葉に疎く理解できないことも多くあったがその度に彼女が教えてくれたのは今となれば感謝しかない。

まあ、まさかこんな形で実行に移すことになるとは思わなかったのはここだけの秘密だ。

「チイツ!!なんだあの加速は!?!」

奥歯を噛む。地面を蹴る足に力を込める。

もつと、もつと前へ進むために自然と体は前に倒される。しかし、それでも追いつかない。追いつけない。目の前を走る男は、既に6バ身半を先を進んでいた。

スタート旗が振り下ろされると同時に、彼は倒れるように前に沈み込み勢いよく駆け出した。

すぐに失速するだろう。慌てる必要もない。そう思っていた少し前の自分を殴り倒してしまいたい。

200, 400, 600と距離が伸びても、彼の速度は全く落ちない。段々と離されるその現実を見て私も加速する。気づけば全力疾走と変わらない速度で芝の上を駆け出している。

(こんな事があつてたまるか！ただの人間に負けてたまるかあ!!!)

“10バ身離された時点で負け”

最初は冗談だと思ったその条件が、今となれば私を締め付ける鎖となつていることに気づいた時には既に遅かった。

「ハアアア!!!」

この後のペースなど知ったことか。あの男の背中だけを目掛けて、苦しい心臓と脚に檄を入れるように私は叫んだ。

彼女の声が聞こえる。後ろから迫ってくる足音も。

既に残り距離は800。9バ身つくかつかないかという差を彼女は全力で詰めてきているのが分かる。

(やはり先行するよりも、前方を追う方が力が出やすいタイプか。さて、まだ伸びてくるか?)

彼女のレースは一度見た。恐ろしいのは後半から終盤にかけての追い上げ。集団をもものともせず抜け出し、駆け抜けるパワーとスピード、スタミナが彼女には既に備わっている。

「ゼッ！ハッ！ハッ！」

ラスト600。彼女の激しい息遣いと、地面を蹴る轟音が聞こえて

くる。おそらく数秒後には抜かれるだろう。

空気が重い。息も詰まる。目の前の相手を食いちぎらんとする圧力が襲いかかる。

(こりやあ並の選手じゃ心折れるわけだ。)

そう思う最中、視界の端に彼女の顔が飛び込んできた。

息も絶え絶えだろう。脚も体も重いだろう。苦しくて仕方ないだろう。

それなのに、彼女の口元と目は楽しそうに笑っていた。

「…だ」

(ん?)

ボソリと、本当に小さく彼女の声が聞こえた。そして一瞬彼女の鋭い目がこちらを捉えた。何かを求め、希望に絶るような瞳だった。

「まだ…：終わらせるな！」

ああ…：凄いな、お前は。

悪かった。散々煽ったくせに、途中で手を抜こうとしたことをどうか許して欲しい。

トレーナーとしてお前の走りを直に見たいと思ったが、ヤメだ。全身全霊で走るとしよう。

地面を掴む足の指に力を込める。風圧に負けぬよう体を沈める。目の前に捉えるのは、既に1バ身先を行く彼女より遥か先のゴールのみ。

「行くぞ、ナリタブライアン」

次の瞬間、彼の足元の地面は爆ぜた。

「1来たか！」

抜いた数秒後に背後から聞こえた爆音。先程とは全く違う威圧感。まるで目の前の獲物を狩る獣のようだ。

(ああ、そうだ。これだ！この感覚だ！私が求めていたものは！)

食うか食われるか、勝つか負けるかのギリギリの緊張感。

互いに鎬を削り合う高揚感。

そして是が非でも私が勝つのだという本能を曝け出すこの感覚。

渴いていた心が満たされるようだ。

体は重い。脚も鉛のようだ。

いくら息を吸っても酸素が回らない。心臓の音が全身に響いて裂けそうだ。

ああ、限界だ。限界寸前だ。

だが、それでも私は勝ちたい。

負けたくない。負けたくない！

「負けて…たまるかアアア!!!」

咆哮と共に最後の一滴まで振り絞る。欲しいのは今、ここでの勝利のみ。あとはもう何もいらぬ！

しかし、現実はそう甘くなかった。

黒い影が静かに。呆気なく、私の横に並ぶ。

たった50足らずの間に、彼は速度を上げ、追いついてしまった。追いつかれてしまった。

彼はこちらに目を向けず、そこからさらに加速してあつという間に抜き去っていく。風を切り裂くように走るアイツの背中中、瞬く間に小さくなっていっていった。

「クツ…アアアアアアア!!!」

悔しさの入り混じった声で叫ぶ。追い縋るように目の前に手を伸ばす。

視界は狭まり、白くなり始めた。プツンと糸が切れた人形のように体から力が抜けていく。

「ブライアン！」

うるさい…少し黙ってくれ

誰かの呼ぶ声を最後に、私は意識を手放した。

「う…ん…」

目が覚めると、知らない部屋の天井が目に入る。

重い体を起こす気にもなれず、首だけを動かして周りを見る。医務室ではないみたいだが、自分がベッドに寝かされていることは理解で

きた。

体を起こすと、いつのまにか掛けられていたタオルケットが落ちる。頭を触ればいつも身につけている標縄も外され、靴も脱がされていた。

どうなっているんだ？状況が理解できないまましているとガチャ、と扉が開く音がした。

「アンタは…」

部屋に入ってきたのは、先程私とレースをしたあの男だった。肩にはクーラーボックスを提げており、こちらに来ると向かいのベッドに腰を下ろした。

「覚えているか？君、ゴールまで走り切った後に倒れたんだぞ。おそらく脱水と疲労…あとエネルギー切れってところだな。」

「走り切ったのか…私は？」

「やっぱ意識飛んでたのか。流石にお前が倒れた時は焦ったけどな。たづなさんやおハナさんも居てくれて助かった。」

症状はハンガーノック…簡単にいえばガス欠だよ。」

ガパツ、とクーラーボックスの蓋を開けると彼は経口補水液やオレシンジユース、カロリーメイトやゼリー飲料、バナナなどを取り出し私の前の置いていった。

「まずは水分を摂って、そこから食べれそうなものから口に入れればいい。寮の方へはルドルフたちが説明しているから、お咎めはないだろう。もうしばらくは休むといいさ。」

そう言いつつ新たに飲み物を取り出す。それは私ではなく自分用だったみたいで、彼は中身を一気に飲み干してしまった。

私もペットボトルの蓋を開けようとする。うまく力が入らず少し苦戦していたら彼が代わりに開けてくれた。

程よく冷えた経口補水液は普段ならあまり美味しいと言えたものではないが、今日はすんなりと飲むことができた。瞬く間に空になった容器を差し出せば、彼は受け取ってくれた。

「体は痛くないか？問題があれば夜間診察をしているところもあるからそこにいくが…」

「今のところは問題ない。気にするな。」

「そうか。明日の朝出る場合もある。その時は教えてくれ。すぐに病院に運ぶ。」

「ああ…それでいい。」

短い会話が終わり、沈黙が続く。

2本目に飲んだスポドリを半分ほど飲み込み、口の中が潤うのを感じつつ食べ物に手を伸ばす。その中に明らかに異質なものがあり、思わず手を取ってしまう。

「アンタ…レース終わりのヤツにミニ羊羹はないだろう…」

よくコンビニのレジ近くで見かけるソレの端を摘みながらそう言えば、彼は同じものを既に一口食べていた。

「案外バカにできないぞ。炭水化物よりも手早くカロリーが取れるし、すぐにエネルギーに変わるからな。ある程度水分を含んでいるから喉が渴いて余計な水分を取ることもない。」

あとはまあ…俺の好物の一つだな。本来ならスポーツ用のやつを渡したかったが生憎手元になくてな。気になるなら今度渡すか?」

「結構だ。」

甘党か、その見た目です。

甘い物は別段好きというわけでもないが、一度手に取ってしまった物を下ろすのも忍びない。

袋を開けて、口の中に放り込む。

小豆と砂糖、ちよつぴりとした塩味が口の中に広がる。しばらく咀嚼した後に飲み込んだそれは意外にも疲れた体にスツと染み込むようだった。

その後も彼に用意された携帯食は瞬く間に私の胃袋に収まってしまった。正直物足りないが、先ほどよりは体に力が戻ってきたのを感じる。

「…一っだけ、聞いていいか?」

「なんだ。」

食べたそばから渡していったゴミを纏めている彼に尋ねれば、手を止めて彼は応じてくれた。

「正直私は…アンタはただの人間だと思っていた。だけど違った。体力も、スピードも、全部私より上だった。アンタは普通じゃない。一体何者なんだ？」

ウマ娘と男性が結婚した場合、大抵はウマ娘が誕生する。勿論、男が生まれる場合はあるがその身体能力はどれだけ母の血を濃く引いたとしても、ウマ娘には遠く及ばない。

なのに、彼の身体能力はそれを遥かに上回るものだった。過去に実例がないだけと言われればそれまでだが…

ジツと隣の彼を見る。私の質問に対して彼は少し悩むように顎に手を当てていたが、決心したように息を一つ入れた。

その直後、シュルンという音とともに彼の腰―ちようど私達の尻尾が生えている辺りからフサフサの…黒い尻尾が一つ生えた。

「…はっ？」

「まあ、そうなるよな。ということでは正解だ、ナリタブライアン。俺は人間ではない。君達と同じ亜人種…『人狼』だよ。」

頭を見ればピコン、と一對の黒い耳が生えている。爪先は鋭く、体も一回りほど大きくなっている。見開いた琥珀色の瞳も窓から差し込む月夜に照らされてより輝いていた。

「ちよ…ちよつと待て。信じられるか、そんな話!？」

人狼の存在は知っているが、それはあくまでゲームや漫画、童謡の中の話だ。実在しているなんて誰も思うわけがない。目の前の情報で頭がパンクしてしまいそうだ。

「なら触ってみるか？・ホレ。」

「わぷっ！」

ぽふん、という音とともに私の顔に彼の尻尾が当たる。フワフワで毛並みの良いそれは枕にしたらさぞ気持ちの良いことだろう。

恐る恐ると尻尾に触れる。時折揺れてくすぐったいが、妙に落ち着く。試しに抱きしめてみようかというところで彼は尻尾を私の顔から離した。

「少しは信じてもらえたか？」

そう言っつて尻尾も耳もしまい、先程の姿―人型（それも正しいのか

分からないが）に戻る彼の言葉に、私は頭を抑える。

「…信じ切れないが、合点はいく。成る程、人狼だからこそアンタは私とレースをするなんてことを提案したのか。」

「まあな。それでも最高速度ではウマ娘にはまず勝てない。だから、俺は走る前からお前を煽り、プライドを刺激した。」

10バ身の条件もその一つさ。案の定、自分のペースで走ることができなかつたろう？

さっきのレース、結果は…言わずとも分かるな？」

そう言われ、私はベッドのシーツを掴んだ。

そうさ。私は負けた。負けたのだ。

初めて、全力で走った。

目の前の相手を追い、差し込んだ。

しかし結果としては、差し返された上に大差負け。しかも、ゴールに辿り着いたかどうかとも記憶にはないほどに。

そこまですべて、彼には勝てなかった。完敗だ。

ああ…悔しい、悔しい。悔しい！

「フツ…グツ…ウウ…！」

視界が滲む。ポタポタと涙が伝い落ちていく。

こんなにも負けるのが悔しいと思うのは…自分が惨めだと思おうのは一体いつぶりだろう。

もしかしたら、初めてかもしれない。

まだ親しくもない、私を負かした男が隣にいるというのに、私の目から涙は止まらなかった。

そんな私を見て、彼は私に問いてきた。

「悔しいか？」

「ズツ…当たり前だ…」

「また勝負したいか？」

「当たり前だ！」

彼の問いに食い入るようにそう叫ぶ。このままで終われるか。終わってなるものか！拳を握り、彼を睨む。

「そうか。お前が今まで負かした相手も、今のお前と同じ気持ちだろ

うな。」

「…どういう意味だ？」

今の私とは相反するように、穏やかな笑みを浮かべて彼は続けて話
す。

「お前の経歴、少し調べさせてもらったよ。

ビワハヤヒデの実妹にして、小学生の頃から無敗…名だたるレース
学校や教室に通うも誰も敵うものはいない。そして最後に訪れたの
がここ、トレセン学園というわけだ。

だが、模擬レースを何度も行うもお前は負け知らず…そのうちに全
力を出すことを恐れてしまったお前は、相手が居なくなることを恐れ
てしまった。

だがな、ブライアン。この学園の生徒はお前が思っているよりも弱
くはない。

今日お前に負けた選手は、トレーナーと共に一からメニューを見直
し取り組んでいる。次にお前と走る時に勝てるように。勿論、他の選
手も同じだ。

それに、まだお前はデビュー前だ。まだ戦っていない格上のウマ娘
なんてごまんという。海外に目を向ければ尚のことだ。」

「何が言いたい？」

「つまり、だ。お前が知らないだけで、お前の渴きを満たす相手はまだ
まだ沢山いるってことだ。

現に、俺のような存在がいて負けるなんて、夢にも思わなかったら
う？」

自分の胸に拳を置きながら彼は笑う。

ああ、そうか。そうだな。

勝手に挑んで、落胆して、諦めて…私は私だけの価値観に囚われて
いたようだ。

そうじゃなかった。外に目を向ければ、まだ私の知らない相手がい
る。知らない世界がある。

これからだ。私の飢えも渴きも満たすのは、これからだのだ。
そしてそれを一緒に満たすことができるのは…

目の前の男を見る。経歴には興味がない。新人かどうかもこの際
どうでも良い。

これはカンだ。だけど、信じるには充分だ。

「アンタ…担当バはまだ居ないよな？」

「勿論。チームリギルのサブトレとはいえ新人なものでね。」

やれやれと態とらしく手を広げるが、彼はすぐに真剣な顔つきにな
る。随分と察しの良いことで助かる。

「良いのか？リギルや他のチームじゃなくて。」

「アンタが良い。私を負かして、散々能書き垂れてくれたんだ。今更
断るほどひ弱でもないだろう？」

そう言うのと、彼は笑った。挑戦的で、熱く滾るような火が彼の目に
宿っていた。

そしてそれは、私も同じなんだろう。

「分かった。お前の実力に恥じぬよう、全力を尽くしてサポートする。

そういえばちゃんとした自己紹介はまだだったな。銘無だ。好き
に呼べ。」

「改めて、ナリタブライアンだ。いつかお前も負かしてやるから、楽し
みにしていてくれ。」

そして…これからよろしく頼む。どうか私の渴きを満たしてくれ
よ、トレーナー？」

互いに差し出した手を強く握る。

彼らの栄光への道を照らすように、空には眩い星と三日月が輝いて
いた。

バケモノトレーナーと悶着と

あのレースを終えた晩から数日。めぐるましく環境が変わったというわけではないが、まあそれなりに忙しくはなった。

ナリタブライアンとの書類契約とその提出。チームリギルからのサブトレーナー退出手続き。トレーナールームへの備品移動。改めて室内トレーニングルームやプールの予約手順や、ジュニア期々シニア期までの各手続きの案内の確認など…まあ色々だ。

チームリギルにサブトレーナーとして在籍していた期間は短いですが、研修の時から一番世話になったチームではあった。おハナさんが指導してきた選手達からも沢山学ばさせてもらった。

「次からは敵同士だな。それもあくまでレースの上でだけ。何かあればすぐに頼りなさい。応援しているわ。今度時間が合えば、お祝いっいでに呑みましよう。私の奢りだ。」

おハナさんからチームを抜ける際に優しく笑いながら、送り出してくれた。勿論、リギルのチームメンバーも同様だった。特に彼女…シンボリルドルフは。

「ルドルフには悪いことをしたなあ…応援すると言ったのに。」

今もまだ鮮明に覚えている。

この学園に来た初日、2人きりの生徒会室で聞いた彼女の偉大な夢。

俺はそれを応援すると、支えると約束したのに、大したことは何もできなかった。

だが、彼女はその夢を現実のものとしてつつある。

デビュー戦を制し、その後のレースも勝ち続けた。この学園初となる「無敗の三冠バ」「絶対のウマ娘」「皇帝」シンボリルドルフ

世界を震撼させ、学園内外にして有名となった彼女はその信頼と実績のもと、高等部一年にして異例の生徒会長に抜擢された。

あの時の小さい彼女が、今や遠くの存在になってしまった。誇らしいような寂しいような、そんな感じだ。

「おい」

「ん…もう終わったのか。」

「ああ、次のメニューをよこせ。」

「その前に水分を取れ。あとタオル。」

ボトルとタオルを手渡せば彼女は素直に受け取る。汗をかいているものの息が切れた様子はない。流石の身体能力だ。

ナリタブライアン…デビュー前だというのにその実力はすでにルドルフ以来の三冠バになり得るとさえ言われている。新人トレーナーとして俺が初めて契約を結んだウマ娘。

新人トレーナーになったばかりのものが担当バ…それもこんな有カバと契約を結ぶことになるとは誰が思うだろうか。

(これは周りからも相当の恨み妬みを買うだろうな。特にブライアンを率いようとして躍起になっていたトレーナー陣から。)

頭にはあの日のレースでブライアンを何とか自分のチームに誘い入れようとしていたトレーナー達の顔が浮かぶ。申し訳なさは微塵も感じないが感情に支配された人間というものは何をしてくるか分からない。特にこういう業界での黒い話なんて学園に入る前から耳にしているし、現場に来てからも見てきた。

まさか自分がその対象になり得ることになるとはなあ…いや、遅かれ早かれなっていたやもしれん。

「おい、どうした?」

「ん、ああ…すまん。少し考え事だ。お前は気にしなくていい。次のメニューに行こう。」

「そうか。ならいい。」

無愛想に返す彼女に次のメニュー伝えれば、すぐにトレーニングに向かつていった。より速い奴らと競い合い、勝つためにはトレーナーと契約を結び、デビュー戦に勝たなければならぬ。

まずはその最初の関門を抜ける。レースに絶対はない。だが、それに近づくことはできる。

ウマ娘には「本格化」と呼ばれる時期があるというが、彼女は今それに入ろうとしている。体の成長もこれからがピークに向かつてい

くと考えれば今は体作りを中心にしつつ得意なものを伸ばしていくことがいいだろう。

(スピード、パワーはいいとして…あとはスタミナ配分だな。なんせあの負けん気の強さだ。囲まれても抜け出せるとは思うが、外から大きく抜け出した方が幾分かマシだ。)

ブライアンの脚質は先行く差し…あの負けん気の強さと異常なまでの勝利への飢えを考えれば性格的にも合っている。

まあ多少その性格が故か、予定より早く仕掛けてしまうではあろうが…デビュー戦前にそこまで直せる時間はない。そこは後回しにして問題はないだろう。

彼女の走っている様子をまとめながら、次のトレーニングはどう組んでいくか頭の中で組み上げ始める。ブライアンも俺も、まだスターラインにも立っていない。これからが本番だ。

そう思つて再度ブライアンに視線を向けようとする、後ろから足音が聞こえてきた。スン、と鼻を鳴らす。そして匂いの正体分かり心の中で盛大にため息をつく。

「何か御用で？」

振り返った先には、先日話した中堅トレーナーが薄っぺらい笑みを浮かべてそこに立っていた。

あの男に、今の私のトレーナーにレースで負けてから私は彼とパートナー契約を結んだ。

私とレースを終えた次の日から契約手続き、トレーナー兼ミーティングルームの準備と備品準備。チームリギルのサブトレーナーから退席し、数日も経たない内にトレーニングメニューを組み上げてきた。

正直レースに出ればトレーナーなんて誰でも良いと思つていたが…毎日のように付き纏ってきたアイツらに比べれば今のアイツの方が何倍もマシだ。まあ、まだメニューに物足りなさもあるがアイツのことだ。言えばすぐに改善してくるだろう。

彼の組んだトレーニングメニューに取り組んでいると、嫌な男の声

が耳に届く。

ジャージの袖で汗を拭いながらその方を向けば、私のトレーナーが
あの中堅トレーナーに責められているのが目に入る。

鬱陶しい。これで何度目だろうか？

既に担当トレーナーを決めた私に「まだ遅くない」「絶対に後悔す
る」とお決まりの台詞を並べて移籍を求める声を聞くのは。いい加減
諦めて欲しいものだ。

まあ、アイツなら問題なく対処するだろう…そう思った矢先だっ
た。

バチン！と一つの鈍い音とともにトレーナーの顔が横に仰け反っ
た。

「な…!?!」

怒り心頭と言わんばかりに顔を赤くし、息を荒くしている男に対し
てトレーナーは少し顔を歪ませていた。相当の力で叩かれたせいか
口の端からは血を流しているのが見えた。

それを見て、私は考えるよりも速く2人の方へ駆け出した。

痛い。鉄の味が口内に広がり、嫌な匂いが鼻につく。

まさか公の場で叩かれるとは微塵も思わなかった。周りにはブラ
イアン以外にもトレーニングをしている者達がいるというのに。

端から流れ出た赤い液体を指で拭いながらも目の前の男を見れば、
まだ怒りは収まらないようで顔は赤いままだった。

まあ、俺が叩かれた事などどうでも良い。これくらいの傷ならすぐ
に治る。それよりも問題なのは…

「やめろブライアン。」

「何故だ？」

すぐ横にまで来ていた彼女のジャージの首元を引っ張り、こちら側
に寄せる。納得いかないとしても言いたげな彼女の瞳は苛立ちと怒り
が混ざっていた。

「落ち着け、レースに出れなくなるぞ。それでもいいのか？」
「…分かった。」

まだ耳は絞られたままだが、少しばかり落ち着きを戻した彼女を見て此方も一息つく。流石に現役のウマ娘が暴れられたら無傷で取り押さえるのは流石に厳しい。

件の男に目を向ければ、先程のブライアンに怯んだのか少し青ざめていた。よくもまあコロコロと顔色が変わることだ。

「まだ私達に用事がありますか？これ以上あるというならば貴方自身の首を絞めるだけになりますか？如何しますか？」

「…後悔するぞ。その前に彼女から身を引くことだな。」

最後にそう吐き捨てて彼は逃げるように去っていった。とは言え、それなりに今の一連の流れを見ていた者も多いことだし、理事長らに何かしらされるだろう。

そして次に視線が向けられるのは当然自分達である。こう言ったものが苦手なブライアンにこのまま練習をさせても意味がないだろう。

「嫌な思いをさせてすまない。このまま切り上げるか？」

「いや…まだやり足りない。」

そうはいうものの、明らかに気が立っているブライアンをこのまま放っておく訳にもいかない。あまり人気のなく、トレーニングもできる場所はないかと少し考えると一つ思い浮かんだ。

「ブライアン、場所を移すぞ。」

「くどい。移りたいならアンタだけでいけ。」

「そんなイライラしながら走っても意味がないだろう。それに今から行く場所はスタミナつけるには申し分ないと思うぞ？」

俺が折れないと分かったのかブライアンは一睨みした後一つため息を吐いた。どうやら移動してくれるようだ。

「…場所は？」

「学園近くの裏山。俺は諸々揃えていくから先に待っていてくれ。」

「分かった。」

渋々と返事をするも彼女はそのまま練習ターフ場から裏山へと向かっていった。俺も彼女の後に続いてその場を後にし、トレーナールームに戻り必要なものを揃えて裏山へと向かった。

「遅い。」

「すまない、少し手間取った。」

私が着いてから暫くしてトレナーはやって来た。背中には大きめのリュックを背負っていた。

「で？一体何をするんだ。」

「裏山を山頂まで走って降りるを繰り返す。以上。」

「…それだけか？」

「まあな。そのかわりこれを付けろ。」

そう言つて彼はリュックを下ろすと中から手首につける重りとマスクを取り出し渡しして来た。そしてもう1組同じものを取り出すと自身に装着し始める。

「アంతも走るのか？」

「山道は視界も悪く足元も不安定だ。何かあったらその場にいなければ対処できないから念のためな。」

そう言つて重りとマスクを装着し終わると再度リュックを背負い直すトレナーを見て私も同じように装着する。重りはつけた事はあるがマスクトレーニングは初めての経験だ。

「そんなにキツイメニユーとは思えないが？」

「ハハハ！流石だな。まあやれば分かる。早速だが行つてみよう。」

そう言つるとトレナーは裏山へと足を踏み入れ、私もその後を追う。あまり立ち会った事はないが確かに足元は整地されていない場所が多く不安定だった。芝やダートとは違う環境にスタミナを奪われる。

更にマスクの影響で普段通りに呼吸しようにも十分な酸素が入ってこない。強制的に呼吸が乱されるのを感じてしまう。

それに反してトレナーは重りもマスクも、山道もどこ吹く風と、快調に登り進んでいく。それを見て無性に腹が立ち私もペースを上げた。

そして無事山頂に到着するも、呼吸の乱れる私に対してトレナー

は息が上がらず平然としていた。本当に人間かこいつは…いや、人間ではないが…

「お疲れ。初めてで今のペースに着いて来れるなら充分だな。一息入れたらすぐ下るぞ。」

「ゼ…ハ…分かった…」

そう言つてリュックからボトルを取り出すと私にパスして来た。それを受け取り口に含みながら私は一つ疑問をぶつけてみた。

「アンタ…その状態でそんな身体能力なら人狼化したらどれほどのものになるんだ？」

時速60キロで3時間は走れる持久力を持つウマ娘以上のスタミナ。そして私とのレースで見せつけたスピード。あの時も、今も彼は人の姿のままであつた。もし人狼化できるとしたならば…

「ん？ああ…もしかして漫画やゲームみたいな人狼化のことを言っているのか？悪いが俺はできないぞ。」

「は？」

「だから、できないの。ああいう変身は。」

信じられない。そう思うも、彼は申し訳なきように頭を掻きながらそう答えた。

「…冗談だろ？あの時は耳や尻尾が生えていたじゃないか。」

そうだ。あの夜、彼は黒い毛に覆われた尻尾を私の顔に当てて来たし、ピコピコと動く耳だつて確かにみたはずだ。できないわけがない。

しかし彼は自嘲気味に笑いながら話してくれた。

「それが俺の限界だ。俺は他の動物ベースの亜人種と違って完全な人狼化も獣化もできない。所謂半端者だ。俺の身体能力は先天的なものよりも、後天的に得たものが多い。幸か不幸か俺の回復力は亜人種の中でも一際でな。それで騙し騙しやっているわけだ。」

つまり…コイツは無茶をし続けている、と言うことか？対ウマ娘の鎮圧任務も、あの時のレースも、もしかしたら今のトレーニングでさえも？

「…すまん。余計なことを言った。」

心配するな、そう言わんばかりに彼は笑って話してくれた。私の手に握られるボトルを回収する。

「今の俺はナリタブライアン、お前のトレーナーだ。お前がレースで勝てるように、渴きを満たせるように助力するのが仕事だ。それに關することなら、出来る事はするつもりだ。」

だからブライアン：お前はレースのことだけを考えて欲しい。」

「アンタは…きつきみみたいな事が起きても同じことを言うのか？」

きつとコイツは、私が知らない所で他のトレーナーにも責められているのかもしれない。私という時でさえ移籍の話がされるのだから、当然そう考えてしまう。

それに、実際に手を出されたが今回が初めてだとしても、今後はないとは言い切れない。

半端な亜人とはいえ彼も人外的な身体能力がある。手を出したら最悪命を奪いかねないことから彼はきつと手を出さずに耐えてしまふのだろう。

普段ならここまで他人など気にもかけないが：コイツは違う。そんな気がしてならない。

そんな私の不安を感じたのか、トレーナーはポン、と私の頭に手を置いた。

「優しいね、ブライアンは。大丈夫、ただではやられないさ。それに味方になってくれる人達も居るから安心して欲しい。」

私の耳に当たらないように気を遣いながら、優しく彼は頭を撫でる。それを突っぱねる気は全く起きなかった。

「私が勝ち続けるば：アンタは何も文句は言われないのか？」

自分でも驚くくらい細い声でトレーナーに問う。答えは決まっている質問に彼は答えてくれた。

「それは分からん。だが、そうだな。勝たないことには何も始まらないのは確かだ。」

2人で勝とう。そう話す彼の言葉に私は頷いた。

バケモノ思う皇帝と

トレーナーと話した後に、登ってきた山道を降り終えると既に陽は傾いていた。

まだ登れないこともないが、慣れていない山道を暗い中進むのは危険だという理由で今日の練習はお開きとなった。

「しばらくはこの登山トレーニングを加えていくつもりだ。このあと自主トレしたくなったら声をかけてくれ。」

「併走でもしてくれるのか?」

「バカ言え…流石に他のウマ娘やトレーナーにお前と併走しているところを見られてみる。それこそ何言われるか分かったものじゃない。」

げんなりとした風話すトレーナーにつまらん、と息をこぼす。しかし、彼の言う通りだ。側から見れば普通の人間と変わらないこの男が私と併走なんてして仕舞えば余計なことを言ってくる輩が増えてくるだけだ。

うるさいのは嫌いだし、私たちのことを勝手に言われるのはもっと嫌いだ。彼との併走などはまたの機会に取っておくか。

(ん…?)

そう思った矢先にふと疑問に思う。

トレーナーとの模擬レースの際には、少ないとは言え見届けていた者たちがいた。

チームリギルのトレーナーに、理事長秘書。そしてリギルに所属する「スポーツカー」の怪物の異名を持つマルゼンスキー。そして「皇帝」にして、この学園の生徒会長を務めるシンボリドルフ。

チームリギルの…確か「おハナさん」と呼ばれていたトレーナーと理事長秘書である2人は分かる。元々彼はリギルのサブトレーナーに所属していたし、学園においても特殊な立ち位置にいるため関係はあるだろう。

では、残り2人はなぜあの場に居たのだろうか?

最悪スタートもゴールもリギルのトレーナーと秘書の2人で足り

るはずなのに…あの場にいる理由はない。何か言われるのが嫌ならば関わる人間は極力少ない方がいいはずなのに、だ。

悶々と考えるも答えは当然見つからない。ならば答えを知る人物に聞くしかないだろう。

「おい」

「ん？」

「あの日、なんであのメンツがレースに居たんだ？リギルのトレーナーと秘書の2人はまだ分かる。だが、残りの2人はあそこにいる必要があつたのか？」

「残り2人？ああ、マルゼンスキーとルドルフか」

私の質問に対してトレーナーは特に隠すつもりもないと言う風に言葉を続けた。

「マルゼンスキーは多分、話を聞いて面白そうだと思つたからだろう。そしてルドルフは俺が人狼であることを知る唯一の学生だ。まあ、今じゃ唯一じゃなくなつたけどな。」

「なに？」

「詳しく聞きたいならルドルフに聞いてみるといい。もしかしたら今は生徒会室で仕事でもしているかもな。」

「…アンタは来ないのか？」

「俺は仕事だ。お前が一緒に行つた方が安心するというなら行くが…どうする？」

「…ッ！要らん！」

下らない冗談を挟むトレーナーの言葉に顔が熱くなるのを感じながら、私は彼のもとを後にした。もう夕方ではあるが寮への門限までは時間はある。それに彼の言う通りであるのであれば…

気付かぬうちに早足になりながら、私は彼の示した場所に向かい始めた。

「じゃあルドルフ、アタシは上がるけど…貴女はどうする？」

「この投書に目を通してから上がることにします。」

「そう。何かあったらすぐに教えてね。お疲れ様〜。」

ふあ、と欠伸を一つしながら荷物をまとめ部屋を後にする先輩に「お疲れ様です」と返すとヒラヒラと手を振りかえしてくれた。

生徒会長に抜擢されたものの、まだまだ未熟な私に対して前生徒会長である彼女は色々教えてくれる。彼女がウマ娘として前線を引退するのを機会に引き継いだ生徒会長という立場ではあるが、周りもそれを受け入れてくれたことに感謝する日々を過ごしている。

現に予算書や備品、次のイベント企画書やメディアへの対応など様々な資料が机の上に山のようにはあるが、6割以上は先輩らが担当し終えているものが並んでいるだけだ。まだまだ私は未完の器であることを痛感させられる。

(浅学非才…理想を掴むまでの道は遙か遠く、か。)

クラシック3冠は獲った。有馬記念も獲った。次の狙いは春の盾、天皇賞だ。世間では「絶対」と言われてはいるが、それと同時に語られるものもある。昨年のジャパンカップ…初の黒星、3位に沈んだレースだった。

(もう敗北は許されない…私は理想の「皇帝」にならなければならないのだから。)

そうだ。私の夢のためにも、理想のためにも2度と敗北は許されない。皆を導くには「絶対」的な指標が必要なのだ。その為には文武問わず欠陥があつて良い筈がない。あつてはならない。その為には私は何度でも栄光の冠を被らなければならないのだ。

(そう彼にも言ったじゃないか。)

皆を導くウマ娘になると。誰もが幸せな世界にするという私の夢を…初めて応援してくれた彼を思い浮かべる。

彼は私の理想を聞いたから、というわけではないだろうが、その後の活躍は目覚ましいものだ。

学問、実技では問題なくオールクリア。特に研修生でありながらウマ娘の脚質適正や調子を見抜く観察眼はずば抜けていた。それを見込みおハナさんや沖野トレーナーはよく可愛がっていたし、模擬レースでは彼と組んだウマ娘の勝率は8割と、他の研修生や並みのトレー

ナー以上であった。

それだけではなく、学園内のウマ娘とトレーナー間に関わる事件の対応。トレーナー達へ暴走したウマ娘に対する防衛アイテムの開発や提供。外部による亜人種や反トレセン学園およびURR A組織による武力活動の鎮圧。対ウマ娘鎮圧部隊や警察との連携の中樞を担える統率力：今では少数のチームを抱えているとも聞いた。

(そして今では、あのナリタブライアンのトレーナー、か)

手に持つ投書を机に置き、椅子の背もたれに体を沈め、天を仰ぐ。2年前に会った時から、随分と彼は遠くに行ってしまった。最後に話したのは、先日行われた彼の見送り会の時だろうか：それ以来までもに話した記憶などない。久しく彼の声を聞いていない。2年間、異性の中で1番聞いた彼の声がどうしようもなく懐かしか思ってしまう。

「会いたい…」

ポツリと、思いがけず出てきた言葉は孤独な部屋の中に消えていった。

もう今日は帰るとしよう。仕事は予定よりも進んでいる。投書の中身も最低限目を通した。門限までは時間もあることだし、軽く汗を流してから帰るのもいいかもしれない。

机の上の書類を整理して、窓の鍵をかけて鞆を抱える。そして生徒会室のドアを手を掛けようとしたときに、コンコンとノックの音が響いた。

(来客？いや、そんな予定はない筈だ。となると学生の誰かか?)

生徒会室にはあまり一般の生徒が近づいてこないことや、トレーニングも終わるこの時間にわざわざノックをして訪れるような物好きな学生などいるのだろうか？

不思議に思いつながらも数歩後ろに下がり、「どうぞ。」と部屋に入ることを相手に促す。

「失礼する。生徒会長様はいるか？」

「君はー」

ドアを開けたそこには、先程まで思っていた彼の担当バが立っていた。

ジャージ姿であることから、トレーニング終わりなのだろう彼女は、ジッと私の顔を見据えている。

「何か生徒会に用かな？」

「いや、用があるのはアンタにだ。会長様。」

そう言つて彼女はドアを閉めるも、静寂が2人と部屋の中にあるだけだった。というよりも、彼女がどうやって切り出せば良いか悩んでいるふうに感じる。

(ふむ…)

何か聞きづらいことなのだろうか。しかし、このまま生徒会室に居続けることにもお互いのために良くないだろう。ならば、こちらから切り出すとしよう。

「君，まだ体を動かす余力は残っているかな？」

「…ああ。」

ぎこちなく頷く彼女に私は笑うと、一つ提案をする。

「実はこれから軽く体を動かさうと思つていてね。よければ付き合つてくれると嬉しいのだが…どうだろうか？」

「ああ，わかった。恩に着る。」

こちらの真意を汲み取ってくれたように彼女はそう話すと、後ろの扉を開けて外に出る。うまく誘導できたことに私も安堵しつつ、彼女の後に続いた。

バケモノ思う皇帝と 2

生徒会室に訪れたら、トレーナーが言っていた通り目的の人物はまだ部屋の中にいた。とは言っても、鞆を横に抱えていたし部屋の電源も落ちていたからこれから帰ろうというタイミングではあったのだが。

(さて、どうやって切り出したものか。)

生徒会室にまで来たのは良い。しかし、だからと言っていきなり「あの日のレースにいたのは何故だ？」なんて聞くのは突拍子もないだろう。

そもそも、彼女ーシンボルドルフと直接話す機会など今回が初めてだ。なおさらきっかけなど見つかるはずもない。そもそも普段から親しく会話するような性格も愛嬌もない私には無理な話かもしれないが：そんなふうに悩んでいるときだ。

「君、まだ体を動かす余力は残っているかな？」

顎に手を当てて、口元に笑みを浮かべながらシンボルドルフはそう尋ねてきた。

確かに疲労はあるが、動けないほどではなく些細なものだ。彼女の言葉に頷くとそのまま話が続く。

「実はこれから軽く体を動かそうと思っていてね。よければ付き合ってくれると嬉しいのだが：どうだろうか？」

正直ありがたい話だ。このまま生徒会室にいるわけにもいかないし、私自身もただ座って話を聞くのは性に合わない。「恩に着る」と一言返し、部屋の外に出れば彼女も後続き、鍵を取り出して施錠する。「それじゃあ私はジャージに着替えてくるとしよう。君は先に玄関で待っていて欲しい。」

「分かった。」

手短に返し、一旦彼女と別れた後に私は正面玄関へと向かった。もうかなり陽は落ちていたが、トレーニングエリアでは照明が照らされ、まだ走っている生徒たちとそれを指導するトレーナーや教員たち

の姿が見受けられる。

それを遠目に眺めながら、軽く体操をして体が解れ始めたタイミングで、制服からジャージに着替えた会長様もやってくる。手にはタオルが2枚握られていた。恐らく私の分まで持ってきてくれたのだろう。わざわざ律儀なことだ。

「待たせたね。それじゃあ行こうか？」

「ああ…メニューは？」

「そうだな…外周をジョギングするくらいで良いんじゃないかな？話をしながらならそれくらいが丁度良いと思うんだが、どうかな？」

恐らく私が話したいことを見据えて、人気のない外周コースを選んでくれたのだろう。確かに、私が聞きたいことは他の連中には聞かれたくないことではあったため私は頷いた。

「それでいい。」

「ふふっ…それでは行こうか。」

そう言っただけで彼女と共に走り出し、門を潜り抜け校舎の外に出る。校舎周りにはちよつとやさつとでは登れない壁で囲まれてはいるが、改めてバカ広い敷地だと痛感する。

暫く走ると体が熱くなり、額に薄らと汗が浮かぶ。それを時折吹く夜風が撫で、サワサワと揺れる音が心地よい。

「銘無くん…彼とのトレーニングはうまくいっているかな？ブライアン。」

隣で走る彼女からトレーナーの話が振られる。

「まだ分からん。まあ、足りないと思つたら直してくれるのはありがたいがな。まあ時折うざつたい程話してくる時はあるが…」

トレーニング途中や、始まる前に脚の様子や体調、食事の内容を細かく聞いてくるのはトレーナーだから故仕方ないとは思うが、時折姉貴みたいに野菜を食えと言ってくるのだけはいただけない。あと、少しでも体に違和感がある素振りを見せれば指摘してくるのもげんわりする時もある。

それを話せばルドルフは「変わらないな」と懐かしむように言葉を溢す。

「アンタも言われたことがあるのか？」

「1年半前に体調を崩した時があつてね。そんなときに練習に出ていたら無理をするなど怒られたよ。初めて彼に怒られたからそれなりにシヨックだったのを覚えている。」

そのあと彼女は色々トレーナーの事を話してくれた。

元々は亜人種と人間が活動する民間組織に属していたこと。

2年前のトレセン学園の施設が破壊され、警察も投げ出した際に事件の真相と犯人を確保するために理事長秘書を通してこの学園に訪れたこと。

そしてその犯人グループの一員を捕縛し、事件を収束させたこと。

他にも、暴走したウマ娘たちに対するトレーナーの自己防衛の術として所属する組織でも運用している技術の共有と、ウマ娘に合わせた道具の開発、ひいては使用法の指導を務めていること。

各自で収めることができなかった場合の外部への救助要請を速やかに行うためのツールを、学園や協会の抱える情報開発部と共に開発したこと。

暴走したウマ娘の鎮圧やアフターフォロー。さらには外部からの武力行使の運営妨害に対しての抑制など…

学園の運営を携わる生徒会や上層部、外部とも随分と関わりがある事を彼女は包み隠さず教えてくれた。

それを聞いて私は唾然とした。それを全て最難関とされる中央トレーナーの資格を得る勉強をしながら行っていたのだ。身体がいくつあっても足りないなんてレベルではない。

「よく過労死しなかったな…」

昔から無理をしようと思えばいくらでもできたみたいだね。時には5日も寝ずに動いていた時なんて瞠目結舌したものさ。頼むから無理をしないでくれて怒りながら泣いたものだから、彼を困らせたのを覚えているよ。」

無理をしようと思えばいくらでもできる…その言葉に私はトレーナーが例の男に叩かれた出来事を思い出してしまった。

「…何かあったのかな？よければ聞かせて欲しい。」

目敏いな。そう思うも私は今日あった出来事を彼女に話す。少し有力な新人トレーナーを弄るのはこの学園内でも尽きないネタであるため、珍しくはないはずだ。

しかし彼女は違った。トレーナーが叩かれ、血を流した事を聞いた瞬間に纏う空気が変わるのを肌で感じた。冷たく、重い「皇帝」の名に恥じない重圧だった。もし、あの男がこの場にいれば間違いなく失禁していたであろう。

「なるほどな…君と手を切らなければ後悔する、と。それを他のトレーナーにも言われているのか。」

「手を出されたのは今回が初めてみたいだがな。目撃者もいるし、理事長らが何かしら処分を下すから気にしなくて良いとは言われた。」

とは言ったものの、今その理事長にすら意見を通せる権力を持つ人物に話してしまった時点であの男の末路は決まってしまったようなものではあるが。

隣で走る会長様の瞳孔は鋭くなり、妖しい色を浮かべていた。ボソボソと呟かれる言葉から時折物騒なことが聞こえるが、敢えて無視をする。面倒ごとはごめんだ。

話を変えるか。そもそも私が聞きたいことはそんなことではないのだから。

「あの日、私とトレーナーの模擬レースを覚えているか？」

「鮮明に覚えているよ。流石に銘無くんから君に勝負を仕掛けたと言った時は驚かされた。何故それを？」

「理事長秘書と、アンタのこのトレーナーがいたのは分かる。けどアンタは何故あの場にいたんだ？そもそも勝負を後押ししたのもアンタだと聞いた。」

アンタは私のトレーナーにとって、なんなんだ？」

そもそもだ。今の話聞いてる限りこの会長様は私のトレーナーにぞっこん…というわけではないだろうが随分とお気に召しているような体でいる。

自分を指導するトレーナーに担当しているウマ娘が惚れてしまうというのは自然な流れかもしれないが、アイツとはそんな関係ではな

いだろうに。

私の質問に彼女を目を点にし、顎に手を当てて考える。気づけば2人ともその場に足を止めていた。

そして暫くした後彼女が口を開いた。

「あの時…彼と君の模擬レースを後押ししたのは、銘無くんが適任だと思っただからだ。」

私は彼が人狼である事を知っていたというのもあるけど、彼なら君と上手くやれるんじゃないかと直感していたんだよ。

それでも、レースの勝敗にトレーナー資格を捨てると聞いた時は気がではなかったよ。彼らしいといえば彼らしいが…

そう言った意味では、私は彼に惚れているのかもしれない。人間味的な意味でね。」

少し照れたように頬を染め、尻尾を揺らす彼女の顔は生徒会長でも、皇帝でもなく年相応の少女の顔をしていた。

「そうか」

「納得してもらえただろうか?」

「するしかないだろう。」

再び走り出した私の後に続いて彼女も走り始める。そこからは互いに無言の時間が続き、気づけばスタート地点に戻っていた。

「随分と話し込んでしまったね。付き合わせてしまってすまない。」

スマホで時間を確認すれば、時計の針は本来走り終わっているであろう時間を大幅に超えていた。それだけ話し込んでしまった時間もあつただろうし、無意識のうちに遠回りで走っていたのかもしれない。

「別に構わん。私も色々聞いたことだしな。」

まだ付き合いが短いとはいえ、知らなかったトレーナーの情報を一気に知れたのは良かっただろう。まあ、だからと言って何か急速に変わるわけではないだろうが。

「もしまた何か有れば、生徒会室にでもきて話してくれ。私個人に頼んできて構わない。いつでも聞き入れよう。」

「…その時が来たならな。」

「ふふ、待っているよ。」

そう言つて私は彼女と別れる。もうすっかりと夜になり空には月と眩く光る星が浮かんでいた。

「あの皇帝様の余裕……いつか剥がしてみたいものだな。」

もし、彼が惚れている言うアイツと共にその首を食いちぎる次元まで行けたのであれば、彼女のその本性を見ることができののだろうか。そう思うとゾクリと身が震えた。

レースに勝ち続ければそれも見えてくる。周りも自然と黙ることだろう。

速くレースを走りたいものだ。そう急ぐ気持ちを感じつつ私は学生寮へと向かうのであった。

鬱憤溜まる怪物と

「ルドルフと自主練をした!？」

「ああ。」

次の日の朝の時間のトレーニングにて、トレーナーに昨晚のことを話したら彼は珍しく驚いていた。

「…お前から誘ったのか?」

「いや。アイツの方へと出向いたのは私だが、自主練に誘ったのは向こうからだ。」

自主練といっても、会話をしながらのジョギングの為気分転換の軽い運動に等しい負荷だ。別に体に異変はないし、調子も悪くない。

それでも心配性なこいつには言わないと、また細かく聞かれるだろうから先に内容を伝えればホッと胸を撫で下ろす。

「しかし、お前とルドルフに共通の話題があるとは…生徒会にでも入るのか?」

「冗談じゃない。誰が好きであんな堅苦しそうな所に入るか。」

げんなりとした風に返せば、彼は「だろうな」と小さく笑って返すのだった。確かに別れる間際に誘われはしたが、椅子に座ってやれ書類整理だ会議だなぞ私の性に合うわけがない。コイツもそれは理解しているだろう。

そのあとは特に何も話はせず、ストレッチを十分というほどした後ウォーミングアップも兼ねてターフを2周ほど軽く流す。静かな朝方の空気の中を走るのはやはり気分が良い。

「よし…昨日の疲労もないな。それじゃあペース走から始めるとするか。」

「分かった。」

トレーナーのトレーニングメニューは朝はアップに時間をかける。負荷はそれほどでもないが、長時間一定のペースで行うものが多い。そして昼、夕方などは負荷が高いがセット数は少なく、種目も多い。それに一度もの足らず、不満を言ったことがあるが、

「まだ体も脳も覚醒し切っていない朝方からいきなり負荷の高いト

レーニングができるか。」

とバツサリと切り捨てられた。私が睨んでもどこ吹く風とトレーナーは全く気にしない。それを何度か繰り返し私の方が折れた。

ストップウォッチを取り出してスタート位置に向かうトレーナーの後を追い、構える。そして「スタート」という合図とともに駆け出す。

「ハッ…ハッ…」

「ペース早いぞ。あと20秒抑えてみてくれ。」

「クッ…！」

距離は一周2,000メートル。コースの特徴としては第一コーナーから緩い下りが続き、第三コーナーにかけて上り坂に入り、最後の直線は平坦となる。

このトレセン学園は全国様々なレース場に対応するためにあらゆるコース形状を模した会場。そして坂路、ダート、ウマ娘専用のタイヤ引き専用コースなどがある。

勿論、芝の状態やコース形状によってペースは変わるのは当然ではあるが、私のトレーナーは基本「崩さない」のを鉄則としている。

何でも、コースの状態をいち早く掴み、いつでも同じペースで走れるような感覚を積むことでその日その日で大きく左右されない習慣をつけるのもこのレーニングの一因とのことだ。

だが、ペースを抑えて走り続けるのは私の性格上ストレスが溜まる。本能のまま駆け出したいのを理性で抑え続けらようなものなのだから、当たり前だ。

そんな悶々とした気持ちを抱えたまま私は3周走り終える。ゴール地点ではトレーナーがタオルとボトルを持って私を待っていた。

「お疲れ様。少し休んで2セット目いくぞ。」

「ああ。」

渡されたボトルを受け取り、中身を飲み一息入れる。思うように走れないストレスもあるが体が変に疲れるということはない。むしろ有り余っているくらいだ。

「次はペースを上げる。」

「言うと思ったが、まだダメだ。」

「何故だ？」

少し強めにトレーナーに言えば、彼はフツと小さく笑った。

「思うように走れないのがストレスなんだろう？それが狙いだ。お前は目の前に敵がいれば食らいつかんとスピードを上げる。だが、集団から抜け出すのには瞬間的に大きくパワーもスタミナも使う。位置取りする際には激しい接触もあるし、大回りをすれば余計なスタミナを消費する。」

「何が言いたい？」

「我慢を覚えろってことだ。思うままにレースを走るのも大事だが、理性で本能を抑え、仕掛け時まで脚を溜めるのも戦略だ。折角の末脚だ、それを無駄に消費するわけにはいかないだろう。」

そこまで言われて仕舞えば、何も言い返せない。現に彼と全力で走り合ったのだから、尚更だ。

そう思うと彼のスマホから休憩時間を終えるアラームが鳴り響く。トレーナーはすぐにそれを止め、私はボトルとタオルを彼に返した。「行ってくる。」

「ああ…それと2セット目、多少ペースは上げていいぞ。」

「本当か!？」

「多少だからな。あまり上がりすぎたら知らせるからその時は落とすように。」

「ああ、分かった。」

メニューとしてはやることは変わらないが、私の気持ちを汲み取ってくれるのは彼の優しさからくるのだろうか。どちらにしろ、先ほどよりはストレスが減るだろう。

「上げすぎだ！ペースを下げろ下げろ！」

「グッ…」

前言撤回。やはりトレーナーはトレーナーだった。

その後も何度かトレーナーから警告ももらうが、同時に良かったところや伸びてきたところも言われはしたがブライアンの耳は不満げに折れたままだった。

「…尻尾モフるか？」

「私のことをなんだと思っている!？」

そうは言うものの、朝のトレーニング終わりにトレーナー部屋にて彼の尻尾をモフモフと抱きしめたり、顔を埋めたりとブライアンは存分に楽しんだ後に授業へと向かっていった。